



ここは高校野球の聖地、阪神甲子園球場。

黒く光るグラウンドの上に四角いベースがポツン、ポツン、ポツンと白く浮かんで見える。本塁から一塁ベースと三塁ベースにむかって光線のように伸びる白い線。白と黒のコントラスト、芸術作品のように美しい。

視線を外野に移すと鮮やかな緑の天然芝。水を含んだ天然芝が太陽に照らされキラキラと緑を強調して輝いている。

吸い込まれるような真っ青な空から真夏の太陽がグラウンドを照らし続けた。

アルプススタンドの上空から筋肉質な入道雲がグラウンドを覗き込む。気まぐれに、太陽を隠しグラウンドに影を落とす。そこに浜風が吹き込んで、一瞬暑さが和らぐ。

グラウンド全体を見守るように立つ黒いバックスクリーン。

バックスクリーンの左側には友野高校と港星学院両校のスターティングメンバーが白く浮かび上がっている。右側にも友野高校、港星学院の文字が白く浮かび上がり黒と白のコントラストが美しい。

右側の友野高校、港星学院の横のスコアの箇所は、今はまだ黒いままだ。

これから毎年のように、似ているけれど、少し違う筋書きのないドラマが巻き起こり、ここに白いスコアが刻まれていく。

そして毎年、このドラマを演出するかのように見えるのが、そう、甲子園の魔物だ。

『甲子園には魔物が棲んでいまーす』テレビやラジオでよく耳にする魔物。この試合でも現れるのだろうか？　そしてどっちに見方するのだろうか？

静まりかえったグラウンドに審判が姿を現す。

初出場の友野高校の真っ白なユニフォーム姿の選手が一塁側ベンチ前に一列に並んだ。少し遅れて甲子園の常連校の港星学院のグレーのユニフォームも三塁側ベンチ前に並んだ。

「よーし、行くぞおー」

「ウォー」

両校の選手が声を張り上げてホームベース前へとダッシュして整列した。

両校乱れなく真っ直ぐに並んだあと、帽子をとり頭を下げ、グラウンドに散った。

《お待たせいたしました。ただ今より……》透き通るような声の場内アナウンスが流れた。

初出場の友野高校と強豪港星学院の試合、新しいドラマが今始まろうとしている。

初出場初勝利へ

『全国高校野球選手権大会、二日目第一試合も大詰めをむかえています』

《よばん～、ライト～、大河内くん～》

『守る、初出場友野高校、一点リードですが、九回裏ツーアウト満塁の大ピンチです。そして攻める港星学院にとっては最も頼りになるバッター、四番の大河内君が打席に向かいます。解説の田辺さん、すごい試合になりましたね』

『そうですね。ここはピッチャーもバッターもこれまでやってきたこと全てをぶつけてほしいです』

友野高校対港星学院の試合。得点は6対5、友野高校が1点リードのままむかえた最終回。

前評判では港星学院が有利と予想されていたのだが、初回到港星学院のエース宮田の不安定な立ち上がりを友野高校がうまく攻めて5点を先制したのが大きかった。

その後、港星学院が追いつけるも友野高校が1点リードで最終回までもってきた。あと少し踏ん張れば友野高校は甲子園初勝利だ。

しかし、それはそんなに簡単なことではなかった。

『おもしろい試合やなあー。こういう試合こそ、わしら魔物の出番やでえー。さあーてと、どのタイミングで登場したろかな。この試合、一段と盛り上げたるでー』

友野高校二年生、セカンドを守る蓑田は甲子園初勝利を目前にし、緊張し体が思うように動かない。

「フー」と息を吐いて、グラブをバンバンと叩いたが、今度は足が震えはじめた。その場でピョンピョンと跳ねてみた。しかし、震えは酷くなり足が地面についている感覚がなくなった。

「やばい、ダメだ～」蓑田は心臓が潰されるんじゃないかと思うくらい苦しくなって胸に手を当てた。

一塁側のアルプススタンドをみると両手を合わせて祈るようなポーズをする女子生徒、暑いのに学ラン姿の男子生徒、ベンチ入りしなかった野球部員、それらの視線がグラウンドを一段と暑くしていた。

三塁側アルプススタンドからは大音量で音楽が響いている。

両方のアルプススタンドから期待と不安がヒシヒシと熱を帯びて伝わってくる。

ピッチャーの間宮は、ここまできたら自分を信じて山崎のミットめがけて投げるしかない。低めに投げれば大丈夫だ、と自分に言い聞かせるようにして目の高さまで持ってきたボールに向かって呟いた。

「絶対に高く浮くなよ」

『田辺さん、間宮君は少し投げにくそうですね』

『そうですね、今日はおさえているとはいえ、強打者の大河内君ですからね。高めは禁物ですし、間宮君得意の低めスライダーも三塁にランナーがいますので、ワンバウンドしてワイルドピッチになるのが怖いのですからね。本当に投げにくい場面です』

『三塁ランナーが返れば同点、二塁ランナーまで返れば逆転サヨナラの場面です』

「絶対に後ろにそらさないで、前で止めます。だから思いきり腕を振って低めに投げてください」キャッチャーの山崎はマスク越しに間宮に向かって目で訴えた。

間宮は山崎のマスク越しの真剣な眼差しを見て、ニコリと笑みを浮かべ頷いた。

「山崎、大丈夫だ。お前のリード通りに構えたところに投げ込むから」

間宮はゆっくりとプレートに足をおき、両手を胸の前において、「フーッ」と息を吐いた。

『間宮くん、セットポジションから、第一球を投げました』

山崎の出したサインは低めのスライダー。間宮の投げたボールは山崎の構えたミットめがけて向かっている。スライダーの切れもよさそうだ。

大河内は積極的に初球から打ちに行く。さすがプロ注目の四番バッター、スイングスピードが速い。

『大河内君、初球から打ちにいったー。しかし、外角のスライダーワンバウンドする球に空振りー。キャッチャーの山崎君もしっかりボールを前に止めたー』

『山崎君、いいですよ。手前でワンバウンドする難しいボールでしたけど、よく体全体でボールを止めました。こういうプレイはピッチャーの間宮君に勇気を与えますね』

山崎は間宮に向かって何度も頷いてからボールを返した。

「間宮さん、ナイスボールです」

間宮は山崎からのボールを受け取り、グラブを前につきだした。

「山崎、お前こそナイスだ」

「大河内～、リラックス、リラックスー。カんでんぞー」港星学院ベンチから大河内に向かって声が飛ぶ。

大河内がベンチの声に頷いてから、ヘルメットのツバを手にかけて深くかぶり直した。バッターボックスに入る前に肩を上下させ「フーッ」と息を吐いた。

暑い、けど、気持ちいい。この対決を楽しめばいい。

「そうだ。リラックス、野球ができることに感謝して楽しもう」大河内は、そう呟いて、ニカッと笑った。

このバッターは今日の間宮さんのスライダーには合っていない。甘いコースは禁物だけど、最後はスライダーで、今みたいに空振りがとれるはずだ。後はそこまでどう組み立てるかだなあ。次はインコースへきわどいところ、ボールでもいい。それをファールにでもしてくれれば、こっちが有利だ、きっと抑えられる。山崎はそう考えて大河内の内角胸元にミットを構えた。

間宮が山崎のサインをみる。内角ストレートかあ。デッドボールが怖いな。間宮が一瞬弱気になった。

「間宮さん思いきってインコースへ投げて下さい。ストライクはいりません、ボールでもいいです」山崎はマスク越しに目で訴える。

間宮はなかなか首を縦にふらない。しかし、横にもふらない。しばらく悩んでプレートをはずした。ロージンバッグに手をやってからボールの感触を確かめるように手の中でボールをくるくると回した。

『田辺さん、ここも間宮君は投げにくそうにしていますね』

『そうですね、大河内君は強打者ですから、甘い球は投げられませんし、慎重になって当然でしょうね』

もう一度山崎のサインを見た。サインは変わらないインコースストレートだ。

「よしっ」間宮は覚悟を決めて首を小さく縦に振った。

『間宮くん、セットポジションに入る、三塁ランナーを見て、二塁ランナーにも目をやりました。大河内くんに対して、足を上げて第二球を投げました』

「絶対に抑えてやるー」

「よーし、打ち返すー」

間宮と大河内の間でお互いの意地がぶつかり合い激しく火花が散った。アルプススタンドからの声援もピークだ。一塁側は祈るように手を合わせ、三塁側からは声援が飛ぶ。

『インコース、ストレート。少し甘く入ったかー』

やばい、甘い、真ん中にきた。山崎は一瞬、目を閉じた。

大河内は獲物をとらえたかのような目をしてバットを鋭く振りだした。

「よーし、もらったー」

大河内が振りだしたバットはボールを真芯で捉えた。

『カッキーン』乾いた金属音が球場内に響いた。

『打った～、痛烈な打球はレフトヘー――、高く舞い上がった――、これは大きい、大きいぞ――、グーンと伸びる』

球場が一瞬静まり返った。球場にいる全ての目が打球の行方を追った。打球はレフトスタンドへ向かってグングンと伸びていく。しかし、伸びるにつれて風に流されていった。

『あー、しかし、打球は左へと切れていく～。ファール、ファールだあ』

「くそーっ」大河内は一塁ベースを回ったところで天を仰いだ。

静まりかえった球場が、一気にドーッとざわついた。

間宮は「フーッ」と息を吐く。

「すげえ打球だなあ」山崎はマスクをとり、汗を拭う。

危なかったが、これで追い込んだ。まだこっちにツキがある。山崎は気持ちを切り替えた。

三球目は高めのつり球で様子を見ることにした。山崎の構えたミットにズバッとストレートがきた。

大河内のバットはピクリともしなかった。山崎は嫌な予感がした。大河内は力みが消えて冷静になってきている。これまでの打席の大河内と少し違う。次の一球、外角スライダーで空振りがとれるだろうか。一瞬悩んだが、他に選択する球は思い浮かばなかった。

山崎が間宮にサインをおくる。予定通り外角スライダー、低めにすれば大丈夫だ。山崎は低く低くとゼスチャーで示した。

ピッチャーの間宮はキャッチャー山崎のサインに頷いた。セットポジションに入る。長い間合い。球場が静まり返る。間宮は自分に観衆の視線が集まっているのを感じた。投げられない。間宮は一旦プレートをはずす。

『間宮君、投げられません。エース対四番、九回裏ツーアウト満塁。勝負の一球です』

「ツーアウト、ツーアウト」山崎は声を張り上げ弱気の虫をはねのけた。

間宮はもう一度セットポジションに入る。

「これまでの全てを出しきる。それだけだ。結果を恐れるな」間宮はそう呟いてから思いっきり腕を振って山崎のミット目がけてボールを投げ込んだ。

外角のスライダーが低めにくるが、山崎の構えたミットの位置より少し高い。大河内ならバットが届いてしまう。

「やばい」山崎は声をもらした。

大河内は少し体制を崩されながらもボールを芯でとらえた。鋭い打球が間宮の足元に向かって飛んだ。

『大河内君、打ったー。打球はピッチャー間宮君の足元を抜けるー』

大丈夫だ、この当たりなら守備範囲の広い蓑田なら追いついてくれる。山崎はそう信じて打球を目で追った。

セカンドの蓑田は必死でホールを追う。よしとれる。蓑田はそう思った。

体を低くして土埃をたてながら、ボールの正面に体を滑り込ませた。そして、何とかボールはグラブに収まった。

『セカンドの蓑田君、よく追い付いたー』

よーし、これをファーストに投げれば、試合終了だ。そして甲子園初勝利だ。

蓑田はグラブに入ったボールを右手に持ちかえ、ファーストに体を向けた。

その時だった。

えっ、うっ、右腕が思うように動かない。投げ方がわからない。ダ、ダメだ、は、早く投げな

いと、セーフになってしまう。

「ウォーッ」ファーストへ投げたつもりだった。

『あーっと、ボールが大きく逸れたあー。ファースト光山君、飛びつくが、とれなーい。ボールはファールゾーンを転々としている～』

うわあーっ、や、やっちまった。暴投だ。

『サードランナーが、今同点のホームを踏む、そして逆転のセカンドランナーもサードを回ってホームへ返ってくる～』

『ライトからボールが返ってきた～』

山崎がボールを取りタッチに行く。

『判定は、セーフ、セーフ、セーフだ～。サヨナラ、サヨナラ、サヨナラだ～、逆転サヨナラ～。九回裏ツーアウトから港星学院が逆転～。友野高校の初勝利の夢は消えてしまいました～。やはり、やはり、ここ甲子園には魔物が棲んでいまーす』

野球をやめたい

「なに一、野球部をやめる、だと～」監督の重光は右手で自分の帽子のツバをあげて、爬虫類のような目で蓑田を睨み付けた。

「は、はい、僕の暴投のせいで甲子園で負けてしまいました。僕がこれ以上野球を続けるのは、先輩達に申し訳ないです」蓑田は帽子を取り直立不動で俯いていた。

『はあ一、こいつ何言い出すんや。そんなことで野球を辞められたら、わしら、魔物が悪者になるんやけどなあ』

「あれはなあ、甲子園の魔物のイタズラだ。お前が一人苦しむことじゃない。これくらいのことで野球やめてたら、みんな野球やめないといけなくなるぞ」

『お一っ、監督さん、その通り。よ一、わかっとる』

「でも、自信が無くなったんです」

『おい、おい、おい、あれくらいで自信無くすなよ。あんたら野球少年が、わしら魔物のせいで自信なくして野球をやめられると、これから、わしらは出にくくなるやないか。わしらが、たま一に顔出すから野球は面白味を増すんやで』

「たかが、野球だ。怖れず、楽しめばいいんだ。野球にエラーはつきものだし、甲子園の魔物もつきものなんだ。たまたま、お前が魔物に目をつけられたただけだ。あの試合、あの時、お前は魔物に選ばれたわけだ。ただそれだけのことだ」重光はそう言ってグラウンドに腰を下ろし胡座をかいた。

「魔物に選ばれたんですか」直立不動の

まま重光を見下ろした。

「まあ、座れや」

「はい」

蓑田は腰を下ろし正座しようとしたが重光から足を崩せと言われ、胡座をかいて重光と向かい合った。

「そう、だから、アハハハハと笑い飛ばしておけ」

『そうそう、い一ねえ、監督さん。監督さんのいう通り。野球を楽しんでくれ。わしらはババ抜きババみたいな存在やと思って楽しんで笑い飛ばしてくれよ。この試合は俺が魔物に選ばれちまった。アハハハハとね』

「監督、少し考えさせてください」

『おいおい、何を考えるんや。そんな必要ないんやから野球を続けろー。これを乗り越えたら、あんた一段と大きくなれるんやでー。あんたを一段と大きく成長させるために、わしはあんたを選んだんやでー』

「よーし、わかった」重光は立ち上がった。

「好きにしろ」重光はそのまま立ち去っていった。

蓑田も立ち上がり重光の背中にむかって頭を下げた。

「監督、有り難うございました」

『監督まで、何言ってんのー。バカかー。考えるまでもないってー、続けろー』

ライバル下山

「蓼田、野球部やめるって本当か」

同学年で同じセカンドのポジション、ライバルの下山が蓼田に声をかけた。

下山は蓼田の暴投で負けたあの試合、アルプススタンドにいた。サヨナラ負けが決まった瞬間、膝から崩れ落ちて立ち上がることの出来ない蓼田を見てニヤニヤと一人笑っていた。

山崎に抱えられ泣きじゃくり、アルプススタンドに向かって挨拶する蓼田に、「ふん、ざまあみる」と呟いていた。

県大会では蓼田より下山の方が試合に出場していたが、甲子園出場が決まって下山はベンチ入りを外された。

甲子園のベンチ入りメンバーが発表された帰り道「なんで、俺が外されたんだよおー」橋の上から川の流れだけが聞こえる暗闇に向かって叫んだ。その叫び声が谷間に響いた後、また、おだやかな川の流れだけが聞こえてきた。その音が自分を嘲笑っているように聞こえた。

「やっぱり、野球部やめようかな。どうせ試合に出してもらえないし」

空を見上げると三日月も自分を嘲笑ってるように見えた。

「はあー」一段と虚しくなるとため息をついた。

「あの試合のせいだ」そう呟いた。

「送りバントのサインのせいだー」もう一度、橋の欄干を握りしめ暗闇に向かって叫んだ。

県大会を勝ち進み準々決勝の試合だった。スターティングメンバーに下山は名前を連ねた。あと三つ勝てば甲子園。学校関係者達も、もしかして甲子園初出場の夢が叶うのではないかと、応援に熱が入ってきた試合だった。

下山の先制タイムリーヒットなどで五点をとり、五対二で友野高校がリードしてむかえた七回裏。

ノーアウト一塁のチャンスに下山に打席が回ってきた。この試合二本のヒットを打っていて打撃は好調だ。試合も三点リードしている。ここで一本打てばダメ押し点がとれる。先制点は自分のタイムリーヒットで叩きだした。ここでダメ押し点を叩き出せば学校中のヒーローになれる。

。

「よーし、俺が決めてやる」

そう思ってバッテリーボックスに向かった。バッテリーボックスの手前まで来て、ヘルメットを両手で持ち上げ右腕で汗を拭いた。ヘルメットを深くかぶってからベンチに視線をやり、監督のサインを確認した。

絶好調の俺には、ヒッティングのサインだと思っていたが、監督からのサインは送りバントだった。

なんで俺にバントなんだ。ベンチの方を見たまま、呆然と立ち尽くし、バッテリーボックスに入

ろうとしなかった。しばらく監督を睨み付けていた。

「打たせてくれ」目で訴えた。

しかし、監督はもう一度送りバントのサインを出した。

下山はベンチに体を向けたまま動こうとしない。

審判に促されてバッターボックスに入った。足元をならして相手ピッチャーを睨み付けた。いつもより腕を高く上げて、股を広げてスラッガーのように大きく構えた。

「バントなんかしない。デカイのをかっ飛ばす」下山は呟いた。

相手ピッチャーも疲れている。バントでなくここで一気に打ち崩すべきだ。ファーストの後の初球をとらえてやる。

相手ピッチャーがセットポジションにはいる。少し間をおいてファーストへ牽制球を投げた。

下山は大きく構えたまま微動だにしない。

「しもやまー」

ベンチから声がしたが、振り向きもしなかった。

相手ピッチャーがキャッチャーのサインに頷き、もう一度セットポジションに入る。ファーストランナーを見て、セカンドランナーもみた。足が上がって初球が投げられた。サードとファーストはバントを警戒して少し前にきた。

下山は足を高く上げて豪快にバットを振りぬいた。

「よーし、もらったー」

内角ストライクゾーンから体にくい込んでくるボールに詰まらされたが、ボールは左中間にフラフラと飛んだ。当たりはよくなかったが飛んだコースが良かった。レフトとセンターが懸命に追いかける。

「落ちろー」下山はファーストへ走りながら叫んだ。

ボールはレフトとセンターの間にポトリと落ちた。

サードコーチはグルグルと手を回す。セカンドランナーは一気にホームへと向かってきた。レフトからホームにボールが返ってきたが、そのボールが大きく逸れてファールグラウンドに転がった。

セカンドランナーはホームを踏んでガッツポーズした。友野高校が一点を追加した。下山もセカンドベースまで達した。

セカンドベース上でベンチにむかってガッツポーズをしたがベンチから下山を見ている者はいなかった。ベンチはホームインした選手とタッチして盛り上がっていた。

「チェッ、なんだよ、俺に感謝しろよ」ベンチに向けて舌打ちした。

ベンチの方を睨んでいると、控えだった蓑田が出てきて審判に何かを告げてから下山の方へと全力で走ってきた。

「あいつ、何しに来るんだ」

《友山高校のセカンドランナー下山君に代わり、蓑田君。セカンドランナーは蓑田君》

場内アナウンスが流れた。

「下山、交代だ」 蓑田は眉間に皺を寄せていた。

「なんで、俺に代走なんだよ。お前より俺の方が走塁上手いだろ」

「お前がサイン無視するからだろ。みんな怒ってるぞ」

「やかましいわー。クソー」 蓑田を睨み付けた。

「お疲れ、早く下がれよ」

「うあーっ」 下山はヘルメットをとって空に向かって声をあげた。

下山はベンチに戻って椅子を蹴とばしヘルメットを地面に叩きつけた。ヘルメットが鈍い音をたてて転がり椅子の下でクルクルと回っていた。

キャプテンの野口が下山のところに来た。

「お前、バントのサイン、無視したよな」 野口は下山の胸ぐらを掴んでおでこがぶつかるくらいに顔を近づけた。

「す、すいません。無視したんじゃないくて、見落したんです。さっき蓑田に言われて、はっとしました」

野口は下山の胸ぐらを掴んだ右手に力を入れ、もう一度顔を近づけ、睨み付けた。

「いいや、お前はサインを無視した」

下山は野口の目を避けるように俯いた。

「すいません。見落しです」

「フン」 野口はこれ以上言っても無駄な気がした。気持ちを切り替えて試合に集中することにした。下山の胸ぐらを掴んでいた右手を突き飛ばすようにして離れた。下山は後ろによろめいて、その勢いのまま椅子にドンと腰を落とした。

「すいませんでした」 下山はみんなに向かって大きな声で詫びたが、誰も下山の方を見ないでグラウンドを見ていた。

大きな歓声が聞こえてきた。次のバッターがスクイズを決めて一点追加した後、セカンドランナーの蓑田が好走塁をみせて一気にホームに向かいヘッドスライディングした。審判の右手が横にひらいた。

「セーフ、セーフ、セーフ」

見事にツーランスクイズが決まった。

蓑田が跳ねるようにしてベンチへとかえってきた。

「蓑田、ナイスラン」 ベンチのみんなから声が飛んだ。

「下山、明日からは蓑田を使うからな」 監督の重光がグラウンドに視線をやったまま下山に告げた。

「な、なんでですか？ 俺は今絶好調なんですけど」

下山が椅子から立ち上がり重光の隣に来て抗議するが、重光はグラウンドを見たまま、下山の方を見なかった。

「お前の調子なんて知らん。俺はチーム全体の調子を上げたいんだ。チーム全体の調子を上げる

ことが、どういうことなのか、それをお前が理解するまで、俺はお前を使わん」

それから準決勝、決勝と勝ち上がり友野高校は初優勝したが、下山がその後の試合に出ることはなかった。

アルプススタンドから甲子園のグラウンドに立つ蓑田の姿を見て涙が出るくらい悔しかった。俺の方が絶対うまいのに、なんでセカンドを守るのは蓑田なんだ。

アルプススタンドからみんなが友野高校に声援を送るなか、一人、友野高校が負けることを願っていた。

それも蓑田がミスして負ける。監督が蓑田を選んだことを後悔してほしいと思っていた。そして、その通りになった。甲子園初勝利目前に蓑田のミスで負けた。下山は思い通りになったとほくそ笑んだ。

「あんな大事なところでエラーしたから……、俺、なんか野球が怖くなった」蓑田は遠くを見て言った。

「じゃあ、仕方ないな。とめても無駄だろ」下山はニヤリと右の口角を上げた。「さっさとやめろ」と心のなかで呟いた。

これで新チームのセカンドは俺のものだ、と思った。

「俺は守備が下手くそだから、ベンチ入りは、お前の方が良かったかもな」

「守備かあ」下山がそう呟いた後、顔を歪めていた。

なに偉そうに言ってんだよ。守備だけじゃない、バッティングだって走塁だって俺はお前より上だ。

「この下手くそが」蓑田に聞こえないように呟いた。

「何か言ったか」

「いや、まっ、野球は守りがしっかりしないと」目を合わさずに言った。

「今まで、ありがとな。お前のおかげで、ここまで頑張れたよ」蓑田は右手を差し出した。

「お、おう」下山も右手を出し握手をした。

いつもは、ここでお互いに意地をはり喧嘩寸前になるのだが、蓑田の元気ない姿に下山は少し戸惑った。

本当にやめるのか？ こいつがいなくなると張り合いがなくなるかもしれないなど、蓑田の後ろ姿を見て思った。

蓑田は、あの試合を投げた先輩のエース間宮に謝りに行くことにした。

試合終了後、謝りはしたが、蓑田は泣いているだけで、しっかりと言葉に出して謝れていなかった。

謝った記憶さえ定かではなかった。自分が何を話したか、間宮に何を言われたかも覚えていなかった。

自分の暴投のせいで試合に負けてしまい、間宮の最後の夏を終わらせてしまった。あの時、自分が暴投せずにアウトにしていれば、最低でももう一試合、間宮は甲子園のマウンドに立つことができたのだ。それを考えると鉛を飲み込んだような気分になる。

普段の間宮は口数も少なく優しくクールな先輩で、蓑田は間宮が怒っている姿を見たことがなかった。

試合中はピッチャーでありながら、みんなに気を配りながらチームを鼓舞していた。

キャプテンの野口は間宮のことを陰のキャプテンだと言っていた。野口は気性が荒く蓑田もよく怒られたが、それを間宮がフォローしてくれていた。

キャッチャーの山崎が間宮のことを「いつも勉強になる」と言っていた。山崎は自分がキャッチャーというポジションで新チームになった時のキャプテンになることを意識しての発言だろうと蓑田は思っていた。

間宮は蓑田がエラーしてマウンドに謝りに行くとお尻をポンポンとグラブで叩いて「ナイスファイト」と言ってニヤリと笑ってくれた。いつもその笑顔に救われた。

どんなピンチの場面でも冷静で顔色ひとつ変えずに投げていた。その姿がかっこよくて憧れの先輩だった。自分も間宮のような先輩になりたいと思っていたがそれは諦めることにした。

「間宮先輩、すいませんでした。僕のエラーのせいで負けてしまって」蓑田は直立不動で深々と頭を下げた。

「今さら何だよ、あの時も謝ってくれたじゃないか」あの時とは試合終了後の泣きじゃくっていた時のことだろう。

「いえ、あの時は泣いてるだけで、しっかりお詫びできていませんでした」また泣きそうになっていた。

「あの涙で充分蓑田の気持ちは伝わったよ」

「いえ、しっかりお詫びしないと、僕の気が済みません」

「そうか、じゃあこれで気が済んだか？」

「えっ、いや、まだ……」これで済ませていいものかと頭の中で色んなものがグルグルと回り言葉が出なくなり俯いてしまった。

「あれはナイスファイトだったなあ。あの打球によく追いついたよ」間宮はあの場面を思い出すように遠くを見て言った。

「あ、はい、ありがとうございます。けど、その後が……、ダメでした」蓼田は一度顔を上げたがまた俯いてしまった。

「気にすんな。野球にエラーはつきものだ。完璧な人間なんていないんだし」

「でも、あそこは大事な場面でしたから。僕がアウトにすれば、先輩方はもう一試合甲子園で野球が出来たのと思うと……」蓼田はぎゅっと両拳を握り下を向いた。

「甲子園のマウンドで投げられたのは、みんなのおかげだ。俺はすごく満足してるし、蓼田やみんなに感謝してる。確かに悔しさはあるけど、それは来年蓼田らが甲子園初勝利してくれればそれでいい」

「あっ、は、はい」蚊の鳴くような声になってしまった。

「なに？ 元気ないな。俺に申し訳ないと思うんなら、来年は甲子園初勝利することをここで約束しろよ」

「……」蓼田は俯いていた。

「ハァー」と間宮がため息をついた。

「すみません」蓼田はぎゅっと両拳を握った。

「蓼田、まさか責任感じて辞めるなんて言うなよな」

「いえ、責任とかじゃなくて……、そんなカッコいいことじゃなくて……」

「じゃあ、なに？」

「ただ、野球が怖くなったんです」

「怖い？」間宮の顔がめずらしく険しくなった。

「はい、またエラーしそうでボールが飛んでくるのが怖いんです」

「ハァー、何甘えたこと言ってんだよ」

「甘えてますか」

「そう、甘えだ」

「けど、僕は……」

「みんな怖いんだよ」間宮は蓼田の言葉を遮るように大きな声を出した。いつもクールな間宮らしくない怒声だった。

蓼田はビックリして身を竦めた。

「みんな怖いんですか」身を竦めたまま間宮の顔を覗き込むように訊いた。

「そう、だから、練習するんだよ。それから……」

「あっ、はい」

「それが、楽しいんだよ。今辞めたらもったいない。やっと野球の怖さがわかったところだ。これから本当の楽しさがわかる」間宮が蓼田の肩に手をおいた。間宮はいつもの優しい表情にもどっていた。

「間宮先輩でも、怖いと思うんことがあるんですか」

「当たり前だ。いつも怖いと思ってる。あの場面でもストライクが入らないんじゃないかと腕が振れなくなってた」

「そんな風には見えませんでした。先輩は堂々としてるようには見えました」

「全然。あの大河内ってバッターのスイングが速いからホームラン打たれそうで怖かったよ。それに、大河内の顔が怪物みたいでデッドボールでも当てたら殺されるんじゃないかとビビってた」

間宮はニコニコと笑って蓑田の顔を見た。蓑田の表情に少し笑みが浮かんだのを見て続けた。「けど、勇気を振り絞って山崎を信じてミットめがけて投げたんだ。結果を怖れないで思いきり投げた」

「そんな思いでマウンドに立っていたのに、それを僕のせいで台無しにしまいました」蓑田はまた深々と頭を下げた。

「それを言うなって。それが野球だから。怖いけど面白いんだ。だから辞めるなよ」

「え、あ、はい……」

『そう、怖いけど面白いんや。それを演出するんが、わしら魔物や。これを乗り越えないと、あんたは絶対に後悔する』

蓑田は間宮と別れた帰り道、間宮には辞めるなと説得されたが、やっぱり続ける勇気は持てなかった。

「俺は、間宮先輩みたいに強くなれないよ」そう呟いた。

机の上に放置していた携帯が鳴っていた。蓑田はベッドに横たわったまま一時間動かさなかった体を無理矢理起こし、読んでいた漫画本を枕元にポンと置いて立ち上がった。机の上の携帯を手にとった。メールが届いているようだ。

「ハァー」とため息をついてから、携帯を操作しながらベッドに腰を下ろした。

キャッチャーの山崎からのメールだった。そろそろ来るかなと思っていた。見なくてもメールの内容は見当がつく。メールを開けるか、一瞬悩んだが指は勝手に動いていた。

『野球部辞めるって本当？』件名もなく本文にこれだけが入っていた。

「やっぱりな」蓑田はそう呟いてから机の上に立て掛けてある写真に視線をやった。甲子園出場の時に撮った記念写真だ。前から二番目右端に映る自分の姿とその隣の山崎に視線を集中させた。二人とも日に焼けた顔を凛々しく作っていた。充実感に満ちたいい表情だ。

写真を撮る寸前までは、お互いに脇腹をくすぐりあい笑いを堪えたり吹き出したりと、はしゃいでいた。

「じゃあ、撮りまーす」とカメラを向けられた瞬間に二人ともキリッと凛々しい顔を作った。写真を撮り終わると、また顔をグシャグシャにして堪えていた笑いを吹き出した。一ヶ月程前のことだけど遠い昔に感じた。

野球部を辞めることを山崎に相談してから監督に伝えるつもりだったが、山崎から返ってくる言葉は想像できたので相談するのをやめた。

今、山崎からのメールを見て、相談しなかったことに後ろめたさのようなものを感じ胸に重くのしかかったが、相談していたらもっと重たいものがのしかかっただろう。

今届いたメールにどう返信したらいいのだろうか、と坊主頭をボリボリと搔いた。。

もし相談したら、山崎のことだから親身になって悩んでくれるだろう。野球を続けるように説得してくれるだろう。いっしょに頑張ろうと言ってくれるだろう。けど、今の自分にはそれに応える自信がない。

『あー、そうなんだ。ごめんな』

蓑田は結局、何も思いつかなくて簡単にそっけなくメールを返した。最後に『ごめんな』というんな思いをこめて付け加えた。

山崎は、蓑田と同じ二年生で、あの試合にキャッチャーで出場していた。二年生で出場していたのは山崎と蓑田の二人だった。

そして新チームのキャプテンは、山崎でほぼ決まっていた。山崎もそのつもりで、自分がキャプテンになったら副キャプテンは蓑田にやってほしいと言っていた。

山崎と蓑田は中学の時からいっしょに野球をやっていた。中学の時の山崎はエースで四番、そしてキャプテンだった。

高校に入ってからピッチャーとして頑張っていたが、一年前に肩の強さを買われてキャ

ッチャーにコンバートされた。その時、山崎はピッチャー失格だなと言って落ち込んでいた。落ち込む山崎を蓑田は元気づけた。

「ピッチャー失格なんかじゃないと思う。監督はヤマはキャッチャーに向いてると思ったんだよ。俺もヤマはキャッチャーに向いてると思う。だから落ち込まないで頑張れよ」そんなことを偉そうに言っていた。

真面目で練習熱心な山崎は、すぐにキャッチャーとして上達しレギュラーになった。体は大きく肩の強い、そして周りを見て冷静に状況判断できる繊細な性格はキャッチャーに向いていたのだろう。

野球センスのある山崎ならどのポジションでもレギュラーになれる。下手くそでミスを怖れながら必死で食らいついてる自分とは違う。だから今の自分の気持ちは山崎にはわかってもらえないだろう。このまま野球部を続けても自分はチームの足を引っ張るだけだ。

携帯が鳴って、また山崎からのメールが届いた。

『絶対辞めるな。新チームと一緒に甲子園目指そうぜ』メールの最後に笑った絵文字がついていた。山崎が絵文字をつけたメールを自分に送るのは多分はじめてだろう。

蓑田は肩を落とし、しばらくぼんやりと宙を見あげた。返す言葉が浮かばない。

すぐにまた、携帯が鳴った。

『絶対辞めるな。暴投したくらいで責任を感じて辞める必要はない。それよりこれから頑張ってる姿を見せる方が先輩たちへの恩返しになるんだ』また絵文字付きだった。『がんばろー』みたいな絵文字だった。

「そんなのわかってるよ」蓑田は携帯をベッドに放り投げた。

「その自信が持てないんだよ」机の上の写真に向けて叫んだ。

責任を感じて辞めるんじゃない。野球が怖くて嫌になったんだ。だから、そっとしておいてくれ。お前に俺の気持ちはわかんねえんだよ。そのままベッドに寝そべって組んだ両手を枕にし天井をぼんやりと眺めていた。

携帯がまた鳴り出した。今度は電話のようだ。

「ハァー、何なんだよ」

体を起こしベッドの隅で叫んでいる携帯を見た。出るべきか悩んだが、いつかは話さないといけないと思い携帯を手にした。

「もしもし」タイヤから空気が漏れるような声になった。

「ミノか？」山崎の声は澄んだ明るい声だった。

「あー、俺に電話してんのに、当たり前だろ」

「いやー、メールの返信ないからさあ」

「ごめん、ちょっと母ちゃんに用事頼まれてて見てなかった」嘘をついたが多分ばれている。

「そうか、そうか。忙しいのに悪いな。今は大丈夫か」

「あー」

「ミノ、元気出せよ。あれくらいのエラー気にすんなよ」

いきなり本題に入ってきて、「あれくらいのエラー」という言葉にイラついた。俺にとって

はそんな軽いもんじゃない。

「そう思いたいよ」少し刺のある声になった。

「なに、イライラしてんだよ。これからいっしょに新チームで頑張ろうぜ」

「いや、やめとく」

「なに言ってんだよ。そんなの俺が認めない」

「俺が認めない」という言葉にイライラが爆発した。

「お前に俺の気持ちなんてわかんないだよ。野球が上手くて監督や先輩からチヤホヤされてるお前と下手くそな俺とは住む世界が違うんだ。だから、もう放つといてくれ」

そう言って電話を切った。携帯をベッドに投げつけた。ベッドで跳ねて床に落ちた。

「蓑田は足が速いから羨ましい。守備範囲も広いし華麗でかっこいいよ。俺は足が遅いからみんなに迷惑かける」

電話を切った後、一年前、山崎にそんなことを言われたことを思い出した。

「そんなやけになるなよ……」話している途中で電話が切れていることに気づいた。携帯を耳からゆっくりと離して通話終了のボタンを押した。山崎は肩を落とした。

「何でだよ」携帯に向かってそう呟いた。その後、ベッドに横たわって枕元に置いてあるスクラップブックを開いた。

《友野高校優勝。甲子園初出場決める》

一ヶ月前の新聞記事だ。記事に載ってある写真には山崎と間宮が抱き合い、その横で嬉しそうに走ってくる蓑田の姿が写っている。

あいつは足が速いし守備も上手い。バッティングだって速球でも変化球でも上手く打つのに、もったいないよ。俺なんて足は遅いしどんくさいし変化球は全く打てないのに。

山崎は野球部に入部当時はピッチャーを希望していたが、ひとつ上には間宮先輩という絶対的なエースがいて、同じ歳には坂本、宮田というすごいピッチャーがいた。自分の出番はないのかなと悩んだが他のポジションを守れる自信がなかった。

一年前、監督からキャッチャーをやれと言われたが、本当は嫌だった。ピッチャー失格だと言われたような気がしていた。足も遅いし守備も下手くそだから守れるポジションがなかったのも、とりあえずキャッチャーをやらされるんだなと思った。

その時、蓑田が励ましてくれた。すごく嬉しかった。キャッチャーとして頑張ってみようと必死で練習した。キャッチャーが楽しくなって、今はキャッチャーで良かったと思っている。

そう思えるようになったのは蓑田のおかげだ。

蓑田は中学の頃はショートを守っていた。蓑田の守備は華麗でかっこよかった。今はセカンドを守っているがセカンドでもかっこいい。新チームになったらショートの野口先輩が引退するので、もしかしたらまた蓑田のショートの華麗な守備が見れると思っていたのに。

蓑田には辞めてほしくない。自分がキャプテンになって蓑田が副キャプテンで、もう一度甲子

園の土を踏みたい。

このスクラップブックに新しい新聞記事を追加したい。そこには蓑田の姿があってほしい。

山崎は職員室と書いてある色褪せたプレートを一瞥してから弱々しくノックしゆっくりとドアをあけ覗き込むようにして中に入った。夏休み中で先生の姿もまばらだった。左側半分だけ蛍光灯が点いている。

「失礼します」グラウンドで出す声の十分の一位の声の大きさだ。

五台の事務机を連ねた島が六つ並ぶ。その奥正面には教頭の机があり、その後ろにホワイトボードがあった。

『祝 野球部甲子園初出場』太く力強い文字でホワイトボードに書いてあった。それを見て少し誇らしくなった。

その下に一回戦八月十日応援者とあり、その横に先生方の名前がずらりと書いてあった。二回戦と書かれた横は空白だった。少しだけさびしくなったが、職員室で誇らしく居心地のよさを感じたのははじめてかもしれない。

左奥の机の島の方を見て呼び出された野球部監督の重光の姿を見つけた。重光は何やら書き物をしているようで大きな背中が丸く小さくなっていた。書き物に夢中なようで山崎が入ってきたことに気づいていない様子だ。山崎は重光の方へゆっくりと歩を進めた。

重光の向かえの机にもう一人先生が座っている。音楽の山中先生だ。山中先生はブラスバンド部の顧問で甲子園ではアルプススタンドからのブラスバンドの応援を仕切ってくれた。若い女の先生で男子生徒から人気がある。山崎もお気に入りの先生だ。黒目の大きな瞳とぶつかって少し胸が跳ねた。

山崎の存在に先に気づいてくれた山中が山崎に微笑みかけてから、目の前の本立ての上に首を伸ばし重光に声をかけてくれた。

「重光先生、野球部の生徒が来てますよ」透き通るきれいな声だった。

重光は、その声でふっと顔をあげて山中に視線を向けた。山中が重光と目を合わせてから、視線を山崎の方に向けた。

「あっ、あーそうか」重光はそう言ってから山崎の方に振り向いた。

「もうそんな時間か」そう言ってから胸を張り両手をグーと伸ばし「フーッ」と息を吐いた。

「監督、おはようございます」

「おっ、忙しいのにすまん。まあまあ、座れや」声がつぶれて少し掠れた声だった。重光は自分の座る隣の机の椅子を引っ張り出して山崎の前につきだした。

「あっ、はい。失礼します」山崎も掠れた声を出して、重光が出してくれた椅子を引き寄せてどしと腰を下ろした。椅子が山崎の体重に悲鳴をあげるようにキュッと鳴った。

「甲子園はやっぱりいいところだったな」机の上を片付けながら懐かしむように重光が言った。

「はい、最高の舞台でした。負けてしまいましたけどすごくいい経験になりました」山崎の頭にはホームベースから見渡す黒土とそこに浮かぶ白線、白いベース、緑の芝、そして黒くそびえ立つバックスクリーンが浮かんだ。

「もう一回、あの球場で野球がやりたいな」

「はい、絶対に」口元をキュッと引き締めた。

「みんなすごくかっこよかったわよ。また来年も頑張ってるね」山中が立ち上がってきれいな透き通る声をかけてくれた。黒い瞳がキラキラと輝いて吸い込まれそうになった。

「はい、ありがとうございます。ブラスバンドの応援に勇気をもらいました」山崎は鼻の下を伸ばしていた。

「山中先生、来年もまたブラスバンドの応援お願いしますね」重光も目尻を下げて鼻の下が伸びていた。

「はい、ぜひ、喜んで」山中はそう言って、二人に笑みを送った。

重光も山崎もグラウンドでは決して見せないような間の抜けた顔になっていた。

「それでは、わたしはお先に失礼しますね」山中は鞆に荷物を片付けながら言った。

「えっ、もう帰っちゃうんですか」重光が残念そうに言う。

「はい、今日はこれで。野球部頑張ってくださいね」

「はい、ありがとうございます。失礼します」山崎が立ち上がって頭を下げた。

「お疲れさまでした」重光も腰を上げて両手を腰に当て首をベコリと下げた。

「それじゃあ、また」山中はそう言ってドアへ向かった。ドアの前で一度振り返り微笑んで右手をヒラヒラと振ってから職員室を出ていった。

二人は山中の後ろ姿に見とれて目で追っていた。山中が振り向いた時に笑みを返しドアから出ていくのを名残惜しそうに見ていた。

「ハァー」重光が閉まったドアを見てため息をついた。

職員室の空気が色褪せたような気がした。二人はドアから視線を剥がして顔を合わせた。

「よーし、はじめるか」重光が腰を下ろし気持ちを切り替えるように両膝を叩いた。

「はい」山崎も椅子に腰を下ろし重光と向き合った。

二人の表情はグラウンドに立つ時の表情に変わった。

「山崎、新チームも明日から始動だ。キャプテン、よろしく頼むな」

「はい、精一杯頑張ります」山崎は椅子に座ったまま背筋をキュッと伸ばした。

「あとな、山崎は生真面目だから、抱え込みすぎてパンクするんじゃないかと心配しているんだ」重光は眉の上あたりを搔きながら心配そうな表情を浮かべた。

「いえ、大丈夫です」

「そうか、まあ、大丈夫だとは思うんだが、キャッチャーというポジションはいろいろと負担も大きいからな、困ったときは一人で抱え込まないで俺でもいいし、他の部員でもいいから相談しろよ」

「監督」両手を膝において少し前のめりになった。

「なんだ？」

「副キャプテンはどうするんですか」

山崎がそう言うと重光はニヤリと笑みを浮かべ人差し指を立てて山崎に向けた。

「それなんだ。今日はそのことで来てもらったんだ。新チームは副キャプテンが決まらないまま

のスタートになってしまったから早く決めないといけないんだ」

「やっぱり、そうでしたか」

山崎は重光から新チームのキャプテンの話を持ちかけられた時に副キャプテンは蓑田にしてほしいとお願いしていた。その蓑田が野球部を辞めると言ってきたと重光から聞いた。辞めるなど説得しようと思ったが自分ではうまくいかなかった。

監督から蓑田に辞めずに副キャプテンとして頑張るように説得してほしいと思った。たぶん監督も同じ気持ちで今日呼び出したのだろう。これから蓑田をどう説得して副キャプテンにするのかを話し合うためのミーティングだ。山崎はそう思っていた。

「副キャプテンは蓑田になってほしいんです」

「そうか、そうか、気持ちはわかるがな、うーん、……」重光はそう言って困ったように宙に視線をやった。しばらく言葉が出てこなかった。

山崎は嫌な予感がした。

「監督、蓑田は……」蓑田が辞めることが決まってしまったのか訊こうと思ったが怖くて訊けなかった。

「蓑田なあ」重光はずっと宙に視線をやったまま山崎の方を見ようとしなかった。

山崎は重光の困ったような表情をじっと見ていた。蓑田の辞めることが決まってしまったんだろうか。監督はとめる気はないんだろうか。

「蓑田に絶対野球部を続けてほしいんです。ですから、監督からも説得して下さい。蓑田を副キャプテンにして下さい」山崎は椅子から立ち上がって深々と頭を下げた。拳に力が入った。

「山崎、落ち着け。今はまず副キャプテンの話だ。蓑田の話はその後だ」重光の眉がハの字になっていた。

「副キャプテンは蓑田しかいません。ですから、あいつに野球部を続けさせることが先決です」

「心配しなくても蓑田は野球部に残るはずだ」

「えっ、蓑田、残りますか」

「ああ、残る。しかしだ」重光は両手を両ひざについて少し前のめりになって山崎の目を覗き込んだ。山中先生に見せていた目とは違い、爬虫類のような目になっていた。監督がこんな目をする時は逆らえない時だとわかっていた。

「は、はい」山崎は肩をすくめた。

「俺が考えてる副キャプテンは蓑田じゃない」

「えっ、……」山崎は目を丸くして言葉がでない。

「俺が思っている副キャプテンは蓑田じゃないんだ」重光がもう一度繰り返した。

「監督も蓑田を副キャプテンにするつもりだと思ってましたけど」エアコンの音にかき消されそうな声だった。

「ハハハ、そうか、そうか。副キャプテンは蓑田と考えたこともあったがな、やっぱり違う。あいつじゃない」

「僕は副キャプテンは蓑田しかないと考えてます」少し抵抗しようとするが声は小さいままだ。

「気持ちはわかるがな。でもな、違う」

「だ、誰、ですか」

「下山だ」

「えっ、し、下山……、ですか」ビックリして声が裏返った。絶対、下山はない。

「ビックリしたか」重光は笑っていた。

「はい」監督は冗談を言っている。山崎はそう信じたかった。

「冗談じゃないぞ。本気だぞ」

山崎の頭に下山がバントのサインを無視した時のことが頭に浮かんだ。

「下山はチームの輪を乱しそうで心配です。副キャプテンは蓑田にして下さい」背筋を伸ばし両拳を膝に置き力を込めて言った。

「いや、下山だ」重光は腕を組んで、グッと胸を張った。

「本当に下山ですか」少し情けない声になった。

「あー、もう決めた」

「でも、なぜ下山なんですか」

重光は腰を浮かせて座り直し背筋を伸ばした。一度視線をホワイトボードにやってから、視線を山崎に戻して話しはじめた。

「蓑田も山崎も周りからの信頼は厚い。それは俺もよくわかっている。ただな、お前たち二人は少しおとなしいんだ」

「おとなしい……、ですか？」

「そう。少し闘争心が足りないんだ。その点、下山はガッツを前面に出す。それが下山の魅力なんだ。下山みたいなタイプと山崎が組んだ方が面白いチームになると思うんだ」

「そうですか……」山崎は呟くように言ってから自分の足元に視線を落とした。

山崎はそのまま彫刻のように体が固まり黙りこんでしまった。重光も黙って腕を組んで山崎の様子を見ていた。

「……」

「……」

「大丈夫だ」重光が堪えきれず山崎の坊主頭に手を置いた。

「下山、ちゃんとやってくれますか」視線を落としたまま言った。

「ああ、下山が副キャプテンになれば、みんな下山の本当の良さがきっとわかるはずだ。下山は上に立てば、きっと変わる。闘争心を出して、みんなを引っ張ってくれる。山崎とも上手くいくはずだ。そして、きっと新チームは下山に助けられる時がくる」

「バントのサインを無視した時に監督は怒ってたじゃないですか」下を向いたままボソボソとした声だ。

「確かに、あれは腹が立った。だがな、あの場面で思いきりスイングする下山の勇気が魅力なんだ。新チームにはあの勇気が必要なんだ」

「勇気ですか？」顔を上げて重光の方を見た。

「そう、あの勇気だ。もし山崎があの場面でバントのサインじゃなかったらどうした？ どんなことを考えた？」

「やはりゲッターが怖いので一二塁間に転がして最悪でもランナーを進めようとしたと思います。僕の足が速ければセーフティバントも考えますが」

「そうだろうな。蓑田も同じように考えただろう。俺もあの場面はゲッターが一番怖かった。だからバントのサインにしたんだ。実はあの時、俺も弱気になっていたんだ。だから攻めの気持ちで送りバントのサインを出したわけじゃないんだ。ゲッターが怖くて出したサインだ。下山を信頼してなかったのかもしれない」

「でも、あそこはバントのサインで正解だったと思います」

「しかし下山は違った。あそこで一気にたたみかけようとしたんだ。結果それで得点できたのも事実だ」

「それは結果論です。もしあそこでゲッターにでもなっていたら流れが相手に行ってしまったかもしれません」

「そうかもしれない。ただな、下山のああいうのも新チームには必要なんだ。サインを無視することはいかんが、ポジティブな結果を考えて、結果を怖れずプレーする姿勢はきっと新チームを強くしてくれる。俺は下山のいいところをもっと引き出してやろうと思っている」

山崎はまた下を向いて黙ってしまった。頭の中に下山の顔と蓑田の顔が怒ったり笑ったりして交互にあらわれグルグルとまわっていた。

山崎には下山と二人でキャプテンと副キャプテンとしてやっていくことが想像できなかった。蓑田が辞めると聞いた時、蓑田じゃなく下山が辞めてくれればいいのにと考えた。

下山は蓑田とよく口論していた。そんな時、山崎はいつも蓑田に加勢した。自分がキャプテンで蓑田が副キャプテンになれば下山は浮いた存在になり孤立して居づらくなり辞めてくれるんじゃないか。そんなことを考えたこともあった。下山はチームの足を引っ張る存在だから辞めてほしいと思った。

しかし、本当は下山の強気でポジティブな性格に嫉妬していただけかもしれない。自分達が下山をあーいう風にしてしまったのかもしれない。監督の言うように下山の良いところが出ればチームは強くなるのかもしれない。

しばらくして覚悟を決めたようにフッと短く息を吐き顔を上げ重光に顔を向けた。

「わかりました。下山といっしょに頑張ります」

それを聞いて重光がニヤリと笑みを浮かべた。

「よーし、ありがとう」重光が頭を下げてから右手を差し出した。山崎も右手を出し、力いっぱい重光の右手を握りしめた。

「これで副キャプテンは決まった。あとは蓑田だな」

「本当に蓑田は野球部続けますか？」

「大丈夫だ。今ごろは続ける気になってるはずだ」

「本当ですか」

「ああ、俺が刺客を送っておいたからな」重光は右の口角を上げて笑った。

山崎が心配して電話をくれたのに、苛立ちをぶつけ一方的に電話を切ってしまった。一段と気が滅入って落ち込んだ。

「あー」倒れこむようにして枕に顔を埋めた。

目を閉じると今でもあのシーンが浮かんでくる。ファーストの光山さんがひきつった顔をしながら自分の投げたボールに必死に飛び付いているあのシーンだ。

長身の光山さんが目一杯ジャンプしても全く届いていなかった。瞬間、目の前が真っ暗になり、その後の事は全くと言っていいほど覚えていない。

試合終了から今まで、誰一人自分がエラーしたことを責める者はいなかった。反対にみんなが優しくなったように感じた。それが余計に辛かった。下山以外はみんな自分に対して腫れ物にさわるような接し方だった。

床に転がったままの携帯が、また鳴っていた。山崎だろうか。さっきの態度を謝るべきだろうなと思い、ベッドから体を起こし携帯を見た。床に放置されていたことへのクレームを言うかのように携帯は激しく鳴っていた。「ハァー」とため息をついてから携帯を拾いあげ画面の表示を見た。そこには『山崎』ではなく『板野さん』と出ている。

「えっ」意外な人からの電話に一瞬目を見開いた。目を擦ってもう一度見た。やっぱり『板野さん』と出ている。

板野さんから電話がかかってくることなど考えられない。自分が憧れていることを知った誰かのイタズラかもしれないと思った。しかし、『板野さん』と表示が出ているので板野さんの携帯からかかってくることは間違いない。

イタズラかもしれない。出ても大丈夫だろうか。憧れの先輩からの電話だ。早く出ないと切れてしまうのはもったいない。胸が二種類の感情でざわつく。震えだした指で通話のボタンを押した。

「もしもし」警戒するような声で蓑田は電話に出た。

「蓑田くん、お疲れー」いきなりハスキーな高い声が耳に飛び込んできた。何度も聞いた声だ。間違いなく野球部マネージャー板野里美先輩の声だ。

野球部の練習中や試合の時に板野先輩が両手をメガホンのように口にあってグラウンドに向けて飛ばす声を何度も聞いた。蓑田が聞き間違えるはずはない。蓑田はどんなに苦しい時でも辛い場面でも、このハスキーな声を聞くと、水を得た魚のように息を吹き返しハツラツと元気になった。

黒髪をポニーテールにし、日に焼けた顔から白い歯が覗く。切れ長な二重瞼から黒い瞳がキラキラと輝く。背丈は蓑田の肩くらいまでしかないが、小さな体から出るハスキーな声がグラウンド中に響き渡った。その声を聞くだけで野球部員たちは元気になった。特に蓑田はそうだった。蓑田にとって板野の存在は大きかった。

蓑田の胸が今までとは違う暴れ方をはじめた。キュッと締め付けられそして胸の奥から熱いものがこみ上げてきた。

蓼田は板野の声をグラウンドでは何度も聞いていたが、板野と直接話したことは数えるほどしかなかった。その数えるほどの会話も短い挨拶程度のものばかりだった。蓼田はその短い会話だけでも顔を真っ赤にし胸の暴れをおさえることが困難になっていた。

その板野から直接電話がかかってきたのだ。急に憧れの先輩マネージャーからの電話に蓼田は直立不動になっていた。

「い、い、板野先輩ですよ」

「そうよ」

「ど、どうも。お疲れさまです」ペコリと頭を下げた。

「なんか、元気ないらしいわね」ハスキーな声がいつもより低い声になった。

「あ、いえ、そんなことはありません。げ、元気です」

板野が首を傾げながら横目で見て口元に笑みを浮かべている姿が蓼田の頭の中に浮かんだ。板野がたまに見せる仕草だ。二重瞼の切れ長な目で見られると、蓼田はいつも興奮していた。

「うおー、板野先輩だー」と心の中で叫んだ。

「うそ。エラーして落ち込んでるって聞いたんだけど」

「あ、そ、そうですね。落ち込んでるというか、先輩方には申し訳ないことをしたと思って反省してたんです。板野先輩申し訳ありませんでした」電話を強く握りながら深々と頭を下げた。

「謝らなくていいわよ。それより野球部辞めるって、それ本当なの」

「えっ、あーっ、えっと、一応そのつもりです。はい」口がカラカラになっていた。辞めると決めていたはずなのに、なぜか『一応そのつもり』とつけ加えていた。

「辞めるのもったいないよ。エラーしたくらいで辞めなくてもいいじゃない」

「あ、あ、はい。で、でも、あの試合、僕のせいで負けて、先輩方は引退が早くなってしまいましたから……、それで、僕が野球を続けるのは……、ちょっと……、どうかなと思ひまして、……」

「そんなの仕方ないじゃない」

蓼田が話しているのを遮るようにハスキーな声をかぶせてきた。

「仕方ない……、ですかね……？」

「そう。蓼田くんも必死でプレーしてたんだから。そうでしょ。わざとエラーして負けようと思ったわけじゃないでしょ」

「あっ、はい。そりゃもちろん。あの時は必死でした」蓼田は額に右手を当てた。汗で右手がべったりと濡れた。その手をズボンで拭いた。

「じゃあ、続けましょ。決まりね」

「でも、あのエラーで、野球が怖くなりましたし、ちょっと野球が嫌いになったかもしれません」

「はあー、何バカなこと言ってんの。そんな情けないこと言わないでよ」

眉がハの字になっている板野の顔が浮かんだ。

「情けない……、ですか？」

「うん、情けない。そんな蓼田くん、嫌い」

「き、き、嫌いですか」声が裏返った。

「うん、大嫌い。だからそんな弱気なこと言わないで。いつもの蓑田くんに戻って。お願い」

「いつもの僕にですか」

「そう、いつもの蓑田くん。守備が上手くて、一、二年生をうまくまとめて、私たち先輩にも気を使ってくれた、強くて優しくて思いやりある蓑田くん」

「僕って、そうでしたかね？」口元がにやけてきた。

「そうよー、カッコいいー、蓑田くん」

カッコいいと言われてゴクリの喉を鳴らした。

「そ、そうですか、カッコいいですか？」

「そう、だから辞めないでね」

「わ、わかりました。野球部を続けます」

「よーし、じゃあ、明日から新チームで頑張ってるね」

「わかりました」

「山崎くん、心配してたわよ。すぐに電話してあげて。監督にはわたしから伝えておくから」

「はい、山崎に電話します。ありがとうございました」

「わたしは引退しても、卒業しても練習に顔出すからね。試合も応援に行くから、絶対頑張ってる」

「わ、わかりました。ぼ、ぼく、これからも必死で練習して、また甲子園に行きます。絶対行きます。板野先輩を甲子園に連れていきます」

「じゃあ、約束ね。今度、気晴らしに遊びに行こうか」

「え、えー、ぼ、ぼくと先輩で、ですか」

「うん、わたし達三年生で野球部の打ち上げやるから、その時においでよ。山崎くんも呼んであげて」

「あ、あー、み、みんな一緒に、ですよ」

「なに、みんなと一緒にだと不満なの」

「い、いえ、そ、そんなことないですが……、板野先輩と二人っきりかなと、ちょっと思ったもので……、はい」蓑田は頭をかいた。

「二人っきりで遊びに行ってもいいわよ。その代わり二度と弱音を吐かないこと」

「は、はい、絶対に弱音を吐きません」

『あらー、鼻の下伸ばして。こいつも単純なやつやな。わしら魔物よりも女の魔力の方が強烈みたいやなあ。まっ、わしらはその程度の扱いにしてくれるのがありがたいわ。これから頑張って来年甲子園で出会おうな』

『甲子園の切符を手にするのはどちらの学校でしょうか？ 二十年ぶり十二回目の甲子園を目指す名港商業か、二年連続二回目の甲子園を目指す友野高校か？ まもなく試合開始です』

友野高校のスターティングメンバー

一番ショート 下山

二番セカンド 蓑田

三番センター 小宮山

四番レフト 榊原

五番キャッチャー 山崎

六番ファースト 宮田

七番ライト 大原

八番サード 相馬

九番ピッチャー 坂本

両手を膝にあて円陣を組む友野高校の選手たち。その真ん中で山崎が地に視線を向けて声を張り上げた。

「ここまで来たら絶対に勝つ。いくぞー」

「ウォー」友野高校の円陣から発せられた声は球場全体に響き渡った。

みんな気合い十分。これなら大丈夫だ、絶対に勝てる。山崎はそう思って円陣から離れたが、すぐに対戦相手の名港商業の円陣から自分たちよりも大きく気合いの入った声が山崎の耳に飛び込んできた。

「ウォー—————」サイレンのように長く大きな声が響き渡った。

山崎は名港商業のベンチ前に視線をやった。名港商業は勢いがあるなど、口元を引き締めた。負けられない一戦だ。

五回裏終了 友野高校 0 対 0 名港商業

五回裏を終了して両チーム得点はゼロ。ヒット数もお互いに二本ずつ。手に汗にぎる投手戦。戦前の予想では五分と五分。名港商業は打撃のチームで友野高校はピッチャーを中心とした守りのチーム。打撃戦になれば名港商業が有利だが投手戦なら友野高校有利だと新聞が勝手に予想していた。

監督の重光は相手投手はスタミナに不安があるはずだから僅差勝負なら後半にチャンスがまわってくると信じていた。しかし、油断は禁物だ。名港商業は準々決勝、準決勝と自慢の打撃が爆発して強豪校を倒して勢いに乗っている。打ちはじめると止まらない。

地方新聞のスポーツ面には『名港商業、古豪復活』の文字が踊っていた。

今年の紙面を思い出す。『ミラクル友野高校』

県大会を勝ち進む度に、その文字がドンドン大きくなっていった。その紙面に目を輝かせていた選手たちは一層気持ちが高まり対戦相手は、その勢いにのまれているのを感じた。そして昨年はその勢いのまま優勝することができた。

今年は立場が変わった。相手の勢いを受け止める側になった。追われる立場になるとプレッシャーも半端ではなく辛いものなんだと、この一年間で重光は痛感した。

新チームになってすぐの秋の大会は三回戦で敗退した。次の日の紙面には『夏優勝の友野高校、早くも敗退』とあった。それを見ただけで呼吸が困難になった。キリキリと胃が痛かった。グラウンドに行くのが怖くなった。この頃から胃薬が欠かせなくなった。

毎年のように甲子園に出場する監督は、どんな精神力をしているのだろうか？ 自分とはまったく次元の違う化け物たちなのだろうと思った。

この試合、ここまでは名港商業の打線をピッチャーの坂本が沈黙させてくれている。しかし勢いにのっているチームだ。今は沈黙しているが、ひとつきっかけを与えてしまうとこのチームは止まらない。何とか先制して、完全に相手の勢いを消したい。

球場の整備が入る。少しリラックスさせようと、ベンチ前で選手たちを円にして地面に座らせた。重光は膝を折って選手全員の顔を見渡した。みんな日に焼けて目がキラキラと輝いている。口元には笑みが浮かんでいる。きっと大丈夫だ。彼らもこの一年間プレッシャーと戦ってきたはずだ。よくここまで頑張ってくれた。きっとこの経験は彼らの将来の肥やしになるはずだ。

「ここまで坂本が相手の勢いを止めてくれている。ここまでは、うちのペースだ。後半は絶対うちが有利になる。あとは、この回だ。この回が勝負だ」

「はい」

「じゃあ、思い切っていけ」

「はいっ」全員の元気な声を聞いてから立ち上がりベンチに引っ込んだ。ペットボトルのフタを開け水を口に流し込んだ。口の中が冷えて気持ちいい。自分でも気づかなかったが相当喉が渴いていたようだ。

「フー」前半でだいぶ神経をすり減らした。

ベンチ前では山崎を中心に円陣を組んで、声を張り上げ守備位置へと散っていった。

こいつらは元気だ。絶対に勝てる。守備位置へと散っていく選手の背番号に視線を泳がせた。

ここまで試合に動きはないが六回の攻撃は両チームとも打順は三巡目で一番バッターからだ。この回がポイントになる。六回表をゼロで抑えれば裏にチャンスがくるはずだ。

坂本の投球練習を仁王立ちで腕を組んでじっと見つめていた。五回までと変わりなくボールに

切れがある。

《六回の表、名港商業の攻撃は一番センター大隣くん》

この大隣という選手は体は小さいがバットコントロールが抜群にうまいしパンチ力もある。そして一番怖いのは走力だ。塁に出すとやっかいだ。

「このバッターは、絶対に塁に出すなよ。要注意の選手だぞ。慎重に、慎重にな」仁王立ちのまま坂本に念を送るように呟いた。

坂本と目が合って何度も頷いて見せた。坂本が大きく頷いた。坂本に通じたようだ。

「うわーっ、しまった」重光が額に右手を当てて天を見上げた。俺が坂本に変な意識をさせてしまったのかもしれない。

『あーっと、また完全なボールです。大隣くんに対してストレートのファーボールです。解説の沢井さん、この回の坂本くんには何か変化はありますか』

『大隣くんが足が速いので塁に出してはいけないと慎重になり過ぎたのかもしれませんがね』

キャッチャーの山崎が立ち上がり、坂本に向けて肩を上下させた。

坂本はそれを見て笑みを浮かべてから、胸を張って肩をグルリと回した。

『ノーアウトでランナーが一塁です。沢井さん、名港商業は願ってもないランナーが出ました。ここはどんな作戦にでるのでしょうか』

『そうですね、大隣くんの足を考えると盗塁もあるかもしれませんが、友野高校のキャッチャー山崎くんも肩がいいですからね。やはりここは確実に送ってくると思います。ランナー二塁にして三番、四番に期待すると思いますね』

ストライクが入らない。こんなはずじゃない。絶対出したくないバッターだったのに。監督が大事なイニングだと言ってたのに、俺は何してんだよ。

「クソー」坂本はロージンを投げつけた。

『二番、栗林くん、早くも送りバントの構えです』

送ってくるか？ これまでの名港商業の攻撃は多彩だ。盗塁、エンドラン、送りバント、なんでもやってくる。しかし、ここは送りバントだろう。決めつけるのは危険だから、ちょっと様子を見よう。山崎が坂本にサインを送る。

坂本がセットポジションに入ってからファーストへすばやい牽制をする。大隣は楽々とファーストへ戻る。

走る気は無さそうだな、やっぱり送ってくるのか。それなら初球は内角高めストレートだ。ボール球でいい。

『坂本くん、栗林くんに対して第一球を投げました』

栗林は送りバントの構えのまま、内角の速いボールにバットを合わせた。バントするには難しいコースだったが、ボールの勢いを上手く殺して三塁手前に転がした。

『栗林くん、上手いバントです。ボールが完全に死んでいます。坂本くんとサードの相馬くんがボールをとりにいく』

坂本がすばやくマウンドをおりてボールを素手でとる。やばい、間に合うか。

山崎が慌てて「ファースト」と坂本に大声で指示を出す。坂本はセカンドを見ることなく、素早くファーストへボールを投げた。

『ピッチャーの坂本くんがボールをとってファーストへ投げる。栗林くんの足が速いぞ～。微妙なタイミング、どうだー』

坂本からのボールがベースカバーに入った蓑田のグラブにおさまる。蓑田は目一杯体を伸ばしている。栗林がファーストを猛スピードで駆け抜ける。二人の間に風が起こった。微妙なタイミングだ。

一塁塁審の右手が上がった。「アウトー」

『一塁は間一髪アウトー』実況が絶叫した。

「フー」ベンチから体を乗り出していた重光が息を吐く。体の力がふっと抜けた。「ワンアウト、ワンアウト」と声を上げてグラウンドに向かって人差し指を立てた。

『名港商業、スコアリングポジションにランナーを進めてバッターは三番木田くんです』

怖いバッターだが今日は坂本には合っていない。大丈夫だ、坂本、強気でいこう。山崎がサインをおくる。

バッター木田に対して、ファール二球で追い込んだ後、一球外角に落ちる球がボールになる。ツーボール、ワンストライクからの四球目。

内角胸元に構えた山崎のミットに切れのあるストレートが吸い込まれる。

『パシッ』と山崎のミットが唸る。

『ワンボール、ツーストライクから内角直球が決まったー、木田くん、バットが出ません。三振です』

「坂本、ナイスボール」山崎が坂本にボールを返す。坂本がニヤリと笑みを浮かべて山崎からのボールを受け取る。ボールがグラブに入った瞬間、ギュッとグラブに力を込めた。そして次のバッターに視線をやった。

次のバッターがネクストバッターズサークルからゆっくりと打席に向かう。丸太のような腕と熊のような体を見て弱気の虫が体中を走る。坂本は弱気の虫を追い払うように声を出した。

「ウォーシィー」

『よばん〜、ファースト高倉くん〜』

ここは勝負するのか、歩かせて次のバッターと勝負するのか、山崎はベンチの重光に視線をやった。重光は腕を組んだまま、目を見開いて顎を何度も前に突き出した。いけ勝負だ、目と顎で訴えていた。

『ツーアウト、ランナー二塁。バッターは四番の高倉くんです。今日ヒット一本打っています。準々決勝ではダメ押しのツーランホームラン、準決勝では決勝のタイムリーツーベースと当たっています。今大会絶好調のバッターにチャンスが回ってきました』

初球は低めのスライダー、ボール球でいい。山崎がサインを送る。

坂本は頷いてセットポジションから初球を投げた。

『坂本くん、第一球を投げました。外角のスライダー、外れてボール』

高倉のバットがピクッと動いたが、簡単にボールを見極めていた。やはりこのバッターは調子が良さそうだ。攻めにくいなと山崎は思った。

その後、外角のストレートでワンストライク。内角高めのストレートがはずれてボール。ツーボール、ワンストライクになった。そして四球目、山崎は外角のスライダーを要求した。カウントは悪くなるがボール球でもいい。甘いコースだけは禁物だ。

『ツーボール、ワンストライク。ピッチャーの坂本くん、セットポジションから第四球を投げました』

外角のスライダーのつもりがスーッと真ん中に入ってきた。

「うわーっ」山崎が思わず悲鳴のような声をもらした。「や、やばい」
絶好調のバッターは甘いボールを絶対逃さない。

『カッキーーーーン』乾いた金属音が響き渡る。

『打った～。打球はレフトへ～、高々の上がった～』

打球はレフトへきれいな放物線を描いて飛んでいった。スラッガーらしい打球だ。

『レフトの榊原くんは見上げるだけ～。先制点は名港商業の四番高倉くんのバットから生まれました～』

坂本は呆然と放物線へ描くボールの行方を見ていた。レフトスタンドでボールがはね、審判が腕をグルグル回しているのを確認してから、がっくりと両手を膝に当て下を向いた。坂本の顔中から汗がポタポタと落ちてマウンドの土に染み込んでいく。

「クソー」今度は天を見上げた。汗が目にしみた。

重光がタイムをかけベンチから伝令がとんでいった。山崎もマウンドへと向かった。

六回表終了 友野高校 0 対 2 名港商業

六回裏、友野高校の攻撃。二点のビハインド。何とか早く追い付きたい。

『六回の裏、友野高校も打順よく一番の下山くんからです。沢井さん、友野高校としては流れを変えたいところですね』

『そうですね、その為には下山くんを塁に出したいですね。彼は足もありますし長打もあります。積極的な選手ですので流れを変えるには、もってこいの選手だと思います』

下山がゆっくりとバッターボックスへと向かう。

俺の一発で流れを変えてやる。下山がバッターボックスに入る前に力強くスイングして、ヘルメットをかぶりなおしバットのグリップをギュッと握りしめた。

「初球で仕留めてやる」

『名港商業としては得点した後のイニングです。このバッターは大事ですね』

『下山くんは思い切りがいいですから、初球は慎重に入ったほうがいいですね』

『名港商業のピッチャー岡林くん、ふりかぶって第一球を投げました』

岡林にとっては不用意な一球だった。先制したことで少し気が緩んだのか甘いコースに投げて

しまった。

「よーし、もらった」

下山は初球から打ちにいく。岡林の球威は落ちてる。甘いストレートだ。ボールを呼び込んで思い切りスイングした。完璧に捉えた打球だ。

『下山くん、打った～。痛烈な打球。打球はレフトポール際へ飛んだ～。ファールかフェアか。フェアなら文句なしのホームランだ～』

三塁側友野高校のベンチが総立ちになってレフトポール際へ飛んでいくボールの行方を追う。ライナー性の鋭い打球はグングン伸びていく。伸びるにしたがってボールは左へと切れていく。

『フェアかファールか』

「切れるなー」友野高校ベンチから声が飛ぶ。

「切れろー」名港商業ベンチからも声が飛ぶ。

『ボールはレフトポールに直撃してグラウンドに落ちました～。ホームラン～』

「よーし。やったー」友野高校のベンチ全員が両手を上げた。

『ホームランです。下山くん、見事なホームランだぁ。友野高校が一点を返しました～』

『このホームランは大きいですね』

下山がゆっくりとダイヤモンドをまわる。三塁ベースを踏んでベンチを見た。みんながベンチから飛び出してガッツポーズをしている。ホームベースへと向かう時に次のバッターの蓑田の姿が目に入った。右手を上げて迎えてくれている。ホームベースを踏んでから蓑田が出してきた右手をパンと叩いた。

「ナイスホームラン」

「おう」下山は無愛想に返事してそのままベンチの方へと向かった。

「ナイスホームラン」山崎がベンチ前で下山に両手を出した。下山も両手を出してパンと両手を合わせた。

「あのピッチャー、前の回からコントロールも球威も落ちてっからよ。きっとお前でも打てるよ」下山は右の口角だけをキュッと上げた。

『蓑田くんがバッターボックスに入ります。友野高校としてはこのまま流れに乗りたいところですよ』

この流れを止めないように、絶対に塁に出たい。ファールボールでもデッドボールでもエラーでも何でもいい。蓑田は一握りバットを短く持った。

『岡林くん、ホームランを打たれて動揺したのでしょうか。二番の蓑田くんにストレートのファールボールです。慌てて一塁側から伝令が向かいます。沢井さん、岡林くんのピッチングに変化はありますか』

『そうですね、前の回から少し疲れたのか球威が落ちてきたようですね。ボールも高めに浮き出していますのでね。下山くんが甘いボールを逃さずに打ちましたから、少し動揺していますかね』

伝令の選手が一言二言話した後、岡林の尻をポンポンと叩いてベンチへと下がっていった。

『マウンド上の輪が解けました。岡林くんの顔から笑みがこぼれています。これで少し落ち着きましたでしょうか』

『連投の疲れもありますし球威が落ちてくるのは仕方ないと思います。後は丁寧に低めにコントロールしていくことですね』

三番の小宮山がバッターボックスに入る。ここは確実に送って四番榊原、五番山崎に期待する。小宮山はバントも上手い。必ず決めてくれるだろう。重光は迷うことなく送りバントのサインを出した。

『小宮山くん、バントしました。これはいいバンドだー、岡林くん、セカンドはあきらめてファーストへ。ファーストはアウト。ワンアウトランナー二塁です。友野高校、同点のランナーをセカンドへ進めました』

小宮山は跳び跳ねるようにしてベンチにかえってきた。

「ナイスバントー」ベンチから声が飛ぶ。小宮山がみんなと手を合わす。パンパンと手を合わす音がベンチを活気づけた。

四番の榊原がバッターボックスへと向かう。「フー」と息を吐いた。相手の四番がチャンスにホームランを打った。自分の頭の上を軽々と越えていった。一步も動けない完璧なホームランだった。自分は四番に抜擢されてから全く打てていない。今度は自分の番だ。初球をライトスタンドへ放り込んでやる。いや、豪快にバックスクリーンだ。

『友野高校、ワンアウトランナー二塁でバッターは四番の榊原くん。友野高校としては、ここで同点に追い付きたいところですね』

ホームランで一気に逆転だ。四番の意地を見せてやる。榊原がいつも以上に大きく構えた。

『岡林くん、セットポジションからセカンドランナーをみて、第一球を投げました』

よーし、きた。榊原は内角の高め、少しボール気味の球を強引に打ちにいった。

『打ったー。打球はライトヘー、いやー』

しかし完全に詰まらされた。ライトまでも届かない。セカンドが手を上げた。

榊原は一塁まで全速で走ったが、ボールはセカンドのグラブに簡単におさまった。

榊原は天を見上げた。「クソー、ボール球だったあ」

ピッチャーの岡林を見るとニヤッと笑っているように見えた。

「クソーッ」岡林を助けてしまった。

《ごぼん〜、キャッチャー山崎くん》

山崎がバッターボックスに向かう。ここで追い付かないとまた相手に流れがいく。大事な打席だ。絶対に力むなよ、バッターボックスに入る前に胸に手を当て自分に言い聞かせた。

『榊原くんは倒れましたが、怖いバッターが続きます。沢井さん、バッテリーは何を注意すればいいでしょうか』

『榊原くんに対して内角のボール球でうちとりましたから、同じように焦らずボール球を上手く使うことですね』

山崎はツーストライクをとられるまでバットが出なかった。追い込まれてからはボールをしっかり見極めて、厳しいボールは上手くファールで逃げた。粘って十球目スリーボールツーストライクからボールは内角の甘いコースにきた。

「よしっ、もらった」山崎は思いきりスイングした。

ボールは内角の甘いコースからストンと落ちた。最後は岡林渾身のフォークボールだ。

『山崎くん、空振り、三振〜。岡林くん粘った〜。最後に素晴らしいフォークボールを投げました』

六回裏終了 友野高校 1 対 2 名港商業

七回は両チーム無得点。 七回裏が終わって友野高校一点のビハインドのまま。

七回裏終了 友野高校 1 対 2 名港商業

八回表はツーアウトからヒットとファールボールで一二塁のピンチを迎えたが次のバッターの二遊間の痛烈な打球を蓑田が横っ飛びで捕球しセカンドでアウトにした。

八回表終了 友野高校 1対2 名港商業

『友野高校セカンドの蓑田くんの今のファインプレーは大きいですね』

『そうですね、流れが名港商業にいきかけてましたので、あれが抜けて一点入ると完全に名港商業のペースになりましたからね。蓑田くんナイスプレーです』

『八回裏は友野高校好打順。一番の下山くんからです。前の打席で見事なホームランを放っています』

『名港商業としては、このバッターは大事ですよ』

「もう一発、放り込んでくる」下山がそう言って打席へと向かった。

名港商業バッテリーも警戒して、ボールから入る。ワンボールからの二球目、長打を警戒して外角のストレート。

『あーっと、下山くん。意表をつくプッシュバントだあ。岡林くんがボールをとりに行くが追い付かない。ファーストの高倉くんがボールをとったがファーストに投げられない。内野安打一』

下山がファーストを駆け抜けてからガッツポーズをする。「よーし」

『ノーアウトランナー一塁。友野高校、同点のランナーが出ました』

下山が一塁ベース上で、してやったりといった表情で笑みを浮かべた。

山崎がベンチから下山に向かって右手の拳を握り高々と上げた。下山も軽くそれに応えるように右手を上げた。

『さあ、友野高校、大事なランナーが出ました。ここはどんな作戦に出るでしょうか』

『やはり終盤ですし、送りバントだと思いますね』

監督のサインを見る。やはり送りバントだ。しっかり送らないと、失敗すると良い流れを止めてしまう。

蓑田は硬直した体をほぐすように二回、三回と素振りをしてからバッターボックスに入った。バントの構えに入る。ファーストとサードが前に来るのが見えた。プレッシャーがかかる。足がガクガクと震えだした。

岡林がファーストへゆっくりと牽制球を投げた。下山はファーストベースへ戻る。蓑田はバッターボックスを外して屈伸する。今の牽制球の間は蓑田にとって有り難かった。少し気持ちを落ち着かせることができた。

『岡林くん、第一球を投げました』

蓑田はバントした。ボールは前進してきたサードへと転がった。少し打球が強くなった。セカンドは微妙なタイミングになりそうだ。サードがボールをとってセカンドへ体を向けた。一瞬投げようとしたが躊躇してファーストへ投げた。

『友野高校、送りバント成功です』

「蓑田、ナイスバント」ベンチからファーストを走り抜けた蓑田に声が飛ぶ。

蓑田は「フー」と息を吐いて胸に手を当てた。「決まってよかったー」

三番小宮山がヒットでランナー一三塁とチャンスが広がる。

四番榊原のあたりはあわやホームランかというライトへのフライ。タッチアップから下山がかえり同点に追い付いた。友野高校のベンチがお祭り騒ぎになった。

そして五番山崎に打席がまわる。下山が厳しい表情で山崎のところへ近づいた。何やら会話を交わし離れ際に下山が山崎の胸に軽く拳をあてた。山崎は頷いてから下山の拳を軽くはらい、ゆっくりとバッターボックスへ向かった。

『山崎くん、打ったー。痛烈な打球がレフトへ〜』

八回裏終了

『九回表名港商業の攻撃です。ツーアウト、ランナーがありません』

『打ったー、打球はショートへ』

「よしっ」キャッチャーの山崎が声を上げた。力のない打球がショートの下山の正面へ飛んでいった。

下山は前進して軽快に打球をさばきファーストへ矢のような送球をする。ファーストの宮田のミットにボールが吸い込まれていく。一瞬、球場が静まり返る。ミットがバシッと力強い音をたてた。一塁塁審の右手が上がった瞬間、球場がどーっと地響きをあげた。

山崎が拳を握りミットをポンと叩いてから、両手を高く上げて天を見上げた。

「決まったー」青空に吸い込まれそうな感覚になった。入道雲が「おめでとう」と自分に笑いかけてくれているように見えた。スーっと体の力が抜けていった。

ピッチャーの坂本を見ると力強く両手を高々と上げている。背の高い坂本が一段と大きく見

えた。その姿が少しかすんで見えた。目頭をギューとおさえてから坂本のもとへ駆け寄った。ショートの下山もセカンドの蓑田もファーストの宮田もサードの相馬もみんなが集まっていった。

みんなの姿もかすんで見えた。

八回裏の打席に入る前、下山が近づいてきた。

「お前、責任感強すぎんだよ。前の打席もガチガチだったじゃねえか。結果なんていいから、初球を思いきり打ってこいよ。ここまでこれたのはお前のおかげなんだから、ダメでも気にすんな」

そう言われて気分が楽になった。とりあえず思い切り打とうと打席に入った。初球、甘いボールがきたので思い切りバットを振り切った。ホームランにはならなかったが、フェンス直撃のタイムリーツーベース。セカンドベースで両手を高々と上げたら、下山がベンチの奥で親指を立てていた。その時も下山の姿がかすんで見えた。恥ずかしいからすぐに手で涙を拭いた。

『試合終了です。友野高校が三対二で名港商業を下し、二年連続県大会優勝を決め、甲子園の切符を手に入りました』

最後の夏 組合せ抽選会

セピア色の照明が優しい光を落とす静謐なホール。真っ赤なシートだけが存在感をアピールし、これだけがこれから始まるセレモニーの興奮を感じさせている。今は誰も座っていないこのシートも組合せ抽選会を心待ちにしているようだ。一時間後には、球児たちで埋めつくされ、この真っ赤なシートの上に白と黒の色が混ざり込む。白と黒のあちらこちらからどよめきが起こり、それがホール内に反響する。その時、彼らの顔もシートのように赤く染まるのだろう。

大阪市北区中之島にある大阪フェスティバルホールは、全国高校野球選手権大会組み合わせ抽選会の始まりを静かに待っていた。

試合だけでなく、このホールにも毎年ドラマが起こる。優勝候補同士の対決、因縁の対決、隣県対決、等々。

負ければ終わりのトーナメント。監督、選手たちにとっては日程や対戦相手が決まる緊張の時だ。

選手たちがぞくぞくと入場し真っ赤な座席に腰を下ろす。ワクワクとドキドキの感情を隣の選手と共有し楽しむようにひそひそと会話を始める。これまで時間が止まっていたようなセピア色の静謐な薄暗いホールが呼吸をはじめた。

友野高校の選手もシートに腰を下ろし、少しリラックスした表情で抽選の始まりを待っていた。

正面の壇上は眩しいほどに明るく照らされ、奥には全国高校野球選手権大会組み合わせと書いてある大きなボードが白く照らされ浮き上がって見える。その壇上の隅の方に遠慮がちに座る山崎の姿が見えた。

膝の上に組んでいる自分の両手に視線を落としているように見える。もしかすると目を閉じているのかもしれない。

「おい、山崎見ろよ。緊張してるぞ。あいつ大丈夫かよ、ハハハ」下山が壇上に向かって指をさして笑った。

そう、山崎だけはワクワクした気持ちになれず、ドキドキの緊張だけで掌は汗でびっしょり濡れていた。何度も生唾を飲み込み、自分の順番を待っていた。

山崎の順番が回ってきた。山崎は立ち上がり緊張した足取りでゆっくりと壇上を歩き抽選箱の前に立った。そして抽選箱に手をつこんだ。

さあ、緊張の時だ。対戦相手が決まる。試合の日程が決まる。

友野高校の選手たちもひそひそ話を中断し緊張した面持ちで真っ白に輝く壇上の山崎に視線を集中させた。

山崎がくじを引く。

手を合わせている蓑田、腕を組んでいる下山、胸に手を当てている坂本、みんなの視線が山崎の手元に集中した。山崎が札を持って舞台正面に立った。

みんなが息を呑んだ。

「友野高校、10のA」少し震えた声がホールに響き渡った。

山崎は、少し笑みを浮かべようとしていたが、右の口角だけが上がり歪んでいた。

瞬間、「ウワー」「ヒェー」「オー」「エーッ」といったいろんな声各シートから上がり、それらが反響しホール全体を埋めつくした。

静まりかえっていた抽選会場に今日一番のどよめきが起こり、ホールがはじめて暴れだした。

その理由は友野高校にあったわけではない。プロ注目、今大会屈指の好投手を擁する優勝候補の相手が決まったからだ。

奥の大きなボードの10のBの位置には優勝候補の昌徳高校の札がかかっていた。その隣にどの学校が入るのだろうか会場内は興味津々、戦々恐々だったのだ。

昌徳高校は五年連続六回目の甲子園出場で、ここ最近、力をつけ甲子園の常連校になった学校だ。そして毎年のように好選手をそろえ、優勝を狙える力を備えて出場していた。卒業生にはプロで活躍する選手も数人いる。これまでの甲子園最高成績は昨年のベスト4。これまで何度も優勝候補に名を連ねたのだが優勝の経験はない。今年はプロ注目の今大会ナンバーワン左腕野々村を擁し優勝を狙っている。

野々村は地方大会でノーヒットノーランを達成し、その試合で最速158キロを記録した。

友野高校の初戦は三日目の第三試合。対戦相手は強豪の昌徳高校に決まった。

抽選で昌徳高校との対戦が決まった瞬間、友野高校の選手達から「えーっ」と悲鳴に近い声が上がった。

頭を抱える者、天を仰ぐもの、うなだれる者、苦笑いする者、ガッツポーズする者、各々が違うリアクションをしていた。

「せっかく甲子園にきたのに、これじゃあまた初戦敗退だな」

「初戦はもうちょっと弱い学校とやりたかったよな」

「うちはクジ運悪いよな。158キロのボールなんてみたことないよ。打てるわけないよ」

抽選会の後、宿舎ではそんな弱気な声がちらほらとこぼれていた。

クジを引いた山崎は苦い笑みを浮かべて口を歪めた。

「何、弱気になってんだよ。せっかく甲子園で試合ができるんだ。強豪校と試合する方が面白

いじゃないか。あの野々村の158キロのボールをバッターボックスで見れるんだぜ、楽しみじゃないか。それに野々村からホームランでも打ったら一生自慢できるぜ」副キャプテンの下山だけは昌徳高校との対戦を喜んでいて。

「けどな、昌徳だぞ。勝てるわけないだろ。ボコボコにやられるぞ」ピッチャーの坂本が頭を抱えた。

「昌徳の今年の打線は大したことないよ。坂本なら抑えられる。お前がゼロに抑えてくれれば勝てるよ」

「なに勝手なこと言ってんだよ。絶対勝てないよ」

「そんなの、わかるかよ。去年の港星学院だって強豪だったぞ。先輩達は港星学院を最後まで追い詰めたじゃねえか。あの試合だってあいつが暴投しなけりゃ勝ってたぜ」

下山が蓑田に向けて顎を突き出した。

「まっ、そうだけど」坂本は気遣うように蓑田に視線をやった。

蓑田は顔を歪めた。「フー」と息を吐き、「そうだ、去年は俺の暴投がなければ港星学院にも勝てたんだ。去年の借りを返すには昌徳高校のような強豪とやる方がいい」

「蓑田、なかなか強気になったな」下山が笑う。

「この一年、お前にいじめられたせいだ」蓑田も笑う。

「相手どうこうより、自分たちの野球を目一杯やることだ。それに相手が強い方が気持ちは高ぶるはずだ。去年の先輩達がそうだった。勝つために必死で戦ってた」山崎が言う。

「よし、これから野々村対策だ。よーし、勝つぞー。勝ったら注目されるぞー」下山がパーンと膝を叩いて立ち上がった。

「まあ、相手が相手だから、負けても、誰も文句言わないだろ」宮田が言うと下山が宮田を睨んだ。

「最初から負けるつもりで試合するな。絶対に勝つんだよ。そのためにこれから準備するんだ」

「下山の言う通りだ。勝つためにどうするかを考えろ。相手が強ければ強いほど、自分たちの力を最大限に発揮するための準備が大切になる。そしてその準備することがお前たちの将来にきつと役立つはずだ」みんなの会話を聞いていた重光が最後に口を挟んだ。

「よし、夕食後にミーティングだ。それまで一旦解散だ」山崎が両手をメガホンにして声を張り上げた。

リラックスの時

「フー、疲れた～」

練習を終え宿泊するホテルの部屋に戻った蓑田はバッグをドンと床に落として、ぐったりと椅子の背もたれに体をあずけ足を前につきだして座った。

部屋に入った瞬間、きれいにメイクされたベッドが目に飛び込んできたので、ベッドに思い切りヘッドスライディングしたいという欲求がわいてきたが、泥と汗にまみれた自分のユニフォーム姿を見て、さすがにそれは躊躇した。

いっしょに部屋に入った山崎はバッグを床に置いてから首をまわしたり、腰をひねったり、アキレス腱を伸ばしたりとストレッチを始めた。それらが一通り終わると台の下に設置してあるサイコロ型の小さな冷蔵庫からペットボトルのミネラルウォーターを取り出し椅子に腰掛けた。よく冷えたペットボトルのフタをあけるとクイッと一口飲んで「フー」と息を吐いた。

隣でだらしなく座る蓑田が「俺もくれ～」と右手を差し出した。山崎はもう一口飲んでから、ペットボトルを蓑田の出す右手に渡した。

「ホイ」

「サンキュー」

蓑田はペットボトルを受けると逆さまになるほど傾け一気に飲み干してしまった。山崎はその様子を眉をハの字にし口角を上げながら見ていた。

「冷蔵庫にもう一本入ってたぞ」

山崎はそう言って、腰を屈め冷蔵庫から新しいミネラルウォーターを取り出した。

「いや、もう大丈夫。スッキリした」

空になったペットボトルをガラスのテーブルの上に置いた。

「フン、俺が飲みたいんだよ。お前が全部飲むとは思わなかったよ」

「あー、ごめん、ごめん。山崎にはつつい甘えちゃうんだよな」蓑田は坊主頭を掻いた。

「別にいいけど」そう言って山崎はミネラルウォーターを一口飲んで宙を眺めた。

「それにしても、今日はみんな気合いが入ってたよな」蓑田が座り直して姿勢を正してから言った。

「みんなの目の色が一日で変わったからビックリしたわ」

「みんなが必死で練習するから、俺もクタクタになった」蓑田は、また座る姿勢を崩し腕をダラんと下げ顎を上げた。「ハァー、疲れたー」

「ミノ、先にシャワー浴びてこいよ」

「いーよ、ヤマ、先にいけよ」

「俺、今から、ちょっと母ちゃんに電話すっから」山崎が携帯を持ち上げ蓑田の方にかざした。

「あっ、そうか、わかった。じゃあ、お先に～。ハァー、疲れた～」蓑田が立ち上がり浴室へと向かった。

「おう、ゆっくり疲れとれよ」

「はいよ～」蓑田は山崎の方を見ないでヒラヒラと手を振って浴室へと消えていった。

山崎がドアが閉まるのを確認してから母親に電話をかけた。

母親はすぐに電話に出た。

「はいはい、茂樹、お疲れさんだねえ」

「ああ」

「昨日の抽選会、テレビで観たわよ。相手の学校、強いらしいじゃない？」

「ああ、まあ、ピッチャーが、プロ注目のピッチャーだからな」

「知ってる。野々村って子でしょ。予選の頃からテレビでよくやってた。160キロ以上のボールが投げれるピッチャーだって。ドラフトの目玉だ、日本の宝だ、大切に育てないといけない、だって。本当、うるさかったわ。うちの茂樹だって宝だよって、テレビに向かって怒鳴りたかったわ」

「ハハハ、で、怒鳴らなかったの」

「さすがにね、一人でテレビに怒鳴ってたらバカみたいじゃない」

「確かに」

「野々村って子、この間もテレビに出てて、甲子園では160キロを出します、て言ってたわ。背も高くてイケメンで、女の子からも人気あるみたいね。まっ、茂樹にはかなわないだろうけどね」

「ハハ」山崎は苦笑いを浮かべた。

そのテレビは山崎も見ていた。甲子園に出場する注目選手を紹介する番組だった。番組で一番長い時間をとってたのが野々村だった。インタビューで目標は？と訊かれて『全国制覇して昌徳高校に新しい歴史を刻むことと甲子園で160キロを出すことです』と力強く話していた。怪物と言われる男だが、顔だけ見ると目がクリクリしていて女の子みたいだ。インタビューの間もニコニコと笑みを絶やさず、アイドルのインタビューのようだった。たまに、はにかむ顔が人気の理由らしい。山崎も抽選会の後のインタビューで、はにかんでみようとしたが、どうもうまくいかなかった。はにかむというより、ひきつった笑みになってしまった。

「ところで、どう？ 体調とか大丈夫？」

「ああ、大丈夫。元気、元気」

「宿舎の食事は？」

「うん、美味しいよ」

「そう、それなら良かった。試合の日はお父さんと二人で甲子園に応援行くからね」

「父さん、来れるの？」

「うん、大丈夫だって。去年は仕事で行けなかったから、今年は絶対行くって、張り切ってる」

「そう、父さん、仕事忙しそうだな」

「でも、茂樹のカッコいい姿、生で見ないともったいないって言ってた」

「カッコいいとこ見せれるかな」

「大丈夫よ。私たちにとっては、茂樹の姿は全てがカッコいいから。野々村なんて全然カッコよくないわ」

「ハハ……」頭を掻きながらまた苦く笑う。

「お爺ちゃんとお婆ちゃんはテレビで応援するって言ってたわ」

「そう」

「お婆ちゃんは昨日の抽選会を録画してて、あなたの出てるシーンばかり何度もみてるみたい」

「婆ちゃんらしいな」

「そうね、みんな喜んでるわ。頑張ってるね」

「まあ、頑張るけど簡単な相手じゃないからな」

「あまり難しく考えないで、相手は強いんだから、負けてもしかたないじゃない。甲子園で楽しんで野球やればいいのよ」

「うん、でも監督は絶対勝つつもりで試合に挑めって言ってるからな」

「へえー、それって勝利至上主義ってやつ？ プロじゃないんだから」受話器の向こうで眉をひそめる母親の顔が浮かんだ。感情の変化が激しい母親は、さっきまでの晴れ渡った感情から曇り空に変わったようだ。この後、嵐になることがよくあることを山崎はわかっている。

「勝利至上主義ってわけじゃないんだけどね」

「じゃあ、負けてもいいじゃない。勝っても負けても参加することに意義があるっていうじゃない。相手が強いんだし、それでいいじゃない」

声のトーンで少しずつ嵐へ近づいていくのがわかる。

「参加することに意義があるって、それって、オリンピックじゃない」

「そんなの、どうでもいいのよ。勝つことが全てではないってことが言いたい。勝利至上主義だと最近問題になってる暴力とか体罰とかにつながるでしょ。甲子園だからって、いい格好する必要のないのよ。負けてもいいの。わたしから監督に文句言ってあげようか」

「大丈夫だよ。監督は勝利至上主義なんかじゃないよ」

「じゃあ、負けてもいいじゃない」

「監督が言いたいのは勝つための準備をして試合に挑めってことなんだ」

「それが勝利至上主義でしょ」

「ちょっと違うよ。監督は、本当は勝ち負けにこだわってるわけじゃないんだ。試合に挑む俺たちの気持ちにこだわっているんだよ。勝つために準備する気持ちを持ってほしいってことなんだよ」

「ふーん、よくわからないけど」

「勝て、じゃなくて俺たちに勝ちたいと思ってほしいんだよ。勝つって目標がある方が努力するでしょ。その努力をしてほしいってこと」

「ああ、そうなの」

「せっかく与えられた甲子園という大舞台で野々村という凄いピッチャーと対戦出来るんだ。こんな経験、そうそう出来るもんじゃない。それを中途半端な気持ちで挑むのはもったいないんだ。勝ちたいと思って試合に挑む方が俺たちの気持ちも盛り上がって努力する。きっとそれが俺たちの成長に繋がるんだ」

「ふーん、茂樹も知らない間に立派なこと言うようになったね」

嵐になる前に気持ちが冷めてくれたようだ。

「組み合わせが決まってから野々村をどう攻略するかとか、みんなで映像をみながら必死で考え

たよ。野々村は何度みても凄いピッチャーなんだ。それで、みんな段々興奮してきて今日の練習はすごく盛り上がったよ。練習終わってからも、さっきまで野々村をイメージしてみんなで素振りしたりしてた。相手が強ければ強いほど、そして勝ちたい気持ちが強くなればなるほど、みんなが一つになれるんだなと思った」

「あー、そうなの。とりあえず、あなたが楽しめてるならお母さんはそれでいいわ」

視界の端に蓑田の姿が入ってきた。視線を向けると蓑田が浴室から出てきたところで、にこりとこちらに笑みを送ってきた。

「うん、じゃあ、そろそろ俺シャワー浴びてくるわ。この後ミーティングもあるし」

「はい、電話ありがとうね」

「おふくろさんか？」蓑田がパンツ一丁のまま坊主頭をバスタオルで拭いている。すでに乾いているので、バスタオルで拭いてもあまり意味がないように思えた。

「あー、たまに電話しとかないとな。ここまで野球やらせてもらったから感謝もしてるし」

「ヤマは親思いだよな。なんか、すごい大人だよ。野球部みんなに気配りもできるし、キャプテンとしてみんなをまとめてるし、本当凄い」蓑田がバスタオルを肩にかけベッドに腰を下ろした。

。

「そんなことないよ。キャプテンやって一年間大変だったけどミノにいっぱい助けてもらった。本当ありがとう」椅子に座ったまま膝に手を置いて山崎が頭を下げた。

「あらたまって、そんな……、照れるなあ」蓑田が坊主頭を搔いた。

「ハハハ、俺も照れるわ」山崎は下を向いておでこを搔いた。

「でも、あと少しで終わりだな」

「そうだな……」山崎が宙に視線をやった。「負けたら……、終わりなんだよな」

「少しでも長くみんなと野球がしたい。だから絶対野々村を攻略したい」蓑田が宙に向かって叫んだ。

「あー、みんな同じ気持ちだ。最後にやっとなんかみんなが同じ気持ちになった気がする。ある意味、こうなれたのは野々村のおかげかもな。あいつが凄いから、みんなの目の色が変わったんだと思う。みんなであいつを攻略しないといけない、そう思うようになったんだ。でないと、俺たちの夏は終わってしまうから」

「そうだな。最初は昌徳に決まって弱気なこと言ってた奴もいたけど、やっぱりみんな勝ちたいんだよ。少しでも長く一緒に野球がやりたいんだ。野々村の映像をみて、みんなの気持ちに火がついたんだと思う」

「野々村の弱点は終盤だ。少し制球が乱れる」

「うん」野々村のピッチングの映像が蓑田の頭に浮かんだ。

「それに坂本も絶好調だ。きっと相手の打線をおさえてくれる」

「2対1で友野高校の勝利。これでどう？」

「うん、いいね。そんな試合にしたい」

「きっと、そうなる」

お互い顔を見て頷いた。

「じゃあ、俺もシャワー浴びてくるな」山崎は立ち上がり浴室へ向かおうとした。

「いってらー」蓼田が右手をヒラヒラとした。

「あっ、そういえば、さっきミノの携帯鳴ってたわ。メールじゃないかな」

「あっ、そう。後で携帯見てみるわ」多分あいつからだ、と蓼田は思った。

蓼田は山崎が風呂のドアを閉めたのを確認してから携帯のメールを開いた。

『今日の調子はどう？ 野々村攻略はできそうかな？ ミノっちならきっとやってくれるよね。
暇な時があったら声が聞きたいなあ』

「やっぱり〜」蓼田の頬が緩んだ。そして、すぐに電話をした。

コール二回で相手が電話に出た。

「もしもし〜、里美〜」

「ミノっち、お疲れ〜。元気〜」

「うん、元気、元気〜。里美の声聞いて一段と元気〜」

「よかった〜。チームの雰囲気はどう？ 昨日は昌徳に決まって、みんな元気ないって言ってたけど」

「いや、今はみんな燃えてる。野々村を打ち崩すんだって必死で練習してる」

「そうか〜、それならよかったわ。最後だもんね。やるしかないよ」

「そう、みんな最後の夏を少しでも長くいっしょに戦いたいから、気持ちがひとつになった気がする」

「そう、それはよかった」

「去年の先輩たちもこんな気持ちだったんだろ？」

「うん、みんな少しでも長くいっしょに野球をやろうって言ってた。野口くんも間宮くんも、すごーく燃えてた」

「それなのに、俺の暴投で終わらせちゃったんだもんなあ」

「あー、また言ってる。もう終わったこと。みんな気にしてないから」

「うん、わかってんだけど、ついつい思い出すよ。あの時の暴投のシーンが今でも頭に浮かぶことがあるんだ。もしあの試合に勝ってたら先輩たち、どこまで勝ち進めたんだろうな、とも思う」

「どうかな。次の相手も強かったしね」

「あの時、俺の所にボールが飛んでこなかったらよかったのにとすることもあった。けど……」
蓼田が言葉につまった。

「けど？」

「うん。けど、もし、俺が暴投してなかったら、今ごろ『里美』なんて呼んでないかもしれないなあって思う。今でも「板野先輩」のままだったのかもしれないなあって」

「そうね、わたしも監督に頼まれなかったら、ミノに声掛けなかったらうね」

「そういう意味じゃ、俺、良かったのかな」

「さあ、わかんない」

「なに、それ」

「別に。それより山崎くんは？」

「元気だよ。今シャワー浴びてる」

「山崎くんもキャプテンとしてよく頑張ったよね」

「うん、山崎はやっぱり凄いよ」

浴室のドアに視線をやると、ちょうどドアが開いて山崎が出てきた。上半身は裸だ。顔から吹き出てくる汗をバスタオルで必死で拭いている。

「あっ、山崎、出てきたわ。じゃあ、また」

「あ、うん。山崎くんにもよろしく。みんな頑張ってるね」

「わかった、頑張る」

蓼田が携帯の通話終了のボタンを押して携帯をベッドの上に置いた。

「ヤマ、すっきりしたか」

「ああ、けど、アツい、アツい」

汗かきの山崎は上半身、汗びっしょりになっていた。

「シャワー浴びたところなのに、もう汗かいてるぞ」

「あー、アツいからな。ハァー、アツいアツい」

「この辺りがエアコンの風がきて気持ちいいぞ」

蓼田は自分が座っている場所をあげ体を横にずらし、あげた場所を右手でパンパンと叩いた。

「サンキュー」山崎が蓼田の隣に座りエアコンの風に当たった。「あー涼しい風がくる〜」エアコンの風が山崎の顔に当たって目を細めている。「気持ちいいけど、やっぱりアツいアツい」

「これでどうだ」蓼田が立ち上がって肩にかけていたバスタオルを外して山崎に風を送るように両手でバタバタと仰いだ。

「サンキュー。けど、まだまだ、アツいアツい」

「えー、暑がり過ぎだ〜」蓼田は眉をハの字にして仰ぐバスタオルのスピードをあげた。

「お前のせいだよ」山崎が蓼田に顎を向けた。

「なんで？ こんなに必死に仰いでんだぞ」一段と仰ぐスピードを上げたが、すぐに力尽きた。

「フー、もう限界。休憩だ」また、山崎の隣に座った。

「さっきの電話だよ」山崎が蓼田を横目で見た。

「えっ」蓼田が山崎に顔を向けた。

「さっきの電話、板野先輩だろ」蓼田のほっぺたを思い切りつねった。

「ふああっ、ふおうだへど」ほっぺたをつねられたままで上手く発音できない。

「やっぱりな。アツいはずだわ」山崎がほっぺたをつねった手を外し、蓼田の頭をパンとはたいた。

「痛えな」

「鼻の下伸ばして嬉しそうな顔しやがって」

「鼻の下なんて伸ばしてねえし」

「あーあ、ミノはいいなあ」山崎はベッドに横たわった。「さっきも、里美～、とかやってたんだろうなあ」寝転がったまま、ベッドにある枕を抱きしめながら言った。

「やってねえし」

「羨ましいなあー」

「ヤマは誰か好きな娘いないのかよ」

「俺？ そうだなあ」

「いんのかよ」

「音楽の山中先生かな」

「えっ、年上じゃねえか」

「お前だって板野先輩は年上だろ」

「さと……、あっ、い、板野先輩は学年は上だけど、生まれた年は一緒だからな」

「えっ、今、さとみて言いかけた？ ハハハ。やっぱりアツいアツい」

「うっせえなあ。それよりヤマと山中先生だと歳が離れすぎだろ」

「うーん、山中先生って何歳だろ」

「二十五歳くらい？」

「わかんないけど、歳なんて関係ないよ」

「今年もブラスバンドの応援で来てくれるんだろ」

「そうみたいだ」

「じゃあ、『山中先生、僕がホームラン打ったら付き合ってください』ってのはどう？」

「うるせえ」

「照れんなよ」

その時、山崎の携帯がせわしなく鳴った。携帯を手にした山崎の顔から笑顔が消えていった。

「誰？」

「や、やばい。監督だ。監督とミーティングの時間だ。まじでやばい、ミノ、俺、先に行くな」

山崎は慌ててジャージを着て部屋を後にした。

最後の夏 甲子園初戦 一回表

友野高校のスターティングメンバー

一番ショート 下山
二番セカンド 蓑田
三番センター 小宮山
四番キャッチャー 山崎
五番レフト 榊原
六番ファースト 宮田
七番ライト 西原
八番サード 相馬
九番ピッチャー 坂本

昌徳高校のスターティングメンバー

一番ショート 菊田
二番センター 宮中
三番ライト 大平
四番ファースト 大井
五番レフト 下條
六番サード 水木
七番セカンド 山内
八番キャッチャー 近藤
九番ピッチャー 野々村

《一回の表、昌徳高校の攻撃は一番ショート菊田くん、ショート菊田くん》
球場内に透き通った声がかたまる。主審が右手を上げて試合開始を告げた。
三塁側アルプススタンドから力強いブラスバンドの演奏が始まった。

『さあ、試合開始です。一回表、昌徳高校の攻撃は一年生のショート菊田くんです。高崎さん、一年生で一番ショートをまかされるのは凄いですよね』

『そうですね、予選を観させてもらいましたが、足もありますし、守備もいいですし、バッティングも非凡なものがあります。一年生とは思えない本当に楽しみな選手ですね』

『昌徳高校は野々村くんばかりが注目されていますがこの一年生の菊田くんも注目の選手です』

「この一年生は気を付けろよ。一年生でまだ体は小さいが油断するな。足もあるし、以外とパンチ力もあるからな。まっ、ストレートには強いけど変化球に対しては、まだまだ一年生だ。脆さもある」

坂本は、監督の言葉を思い出していた。昌徳打線の対策のためのバッテリミーティングの時だった。ホテルの会議室に自分と山崎、宮田、塚原、笹本の五人が一番前のテーブルに横一列に座り、前のテレビに映る菊田の予選の映像をみている時の言葉だった。

たしか、あのミーティングの時、めずらしく山崎が遅れてきた。「遅れてすみません」と会議室に入り、慌てて自分の隣に汗びっしょりのまま座った。監督が山崎に「これ見ながらしっかり聞いておけ」と山崎の前に一冊のノートを手で置いた。山崎がノートを開いたので、覗きこむとビッシリと昌徳高校の選手のデータが書き込まれていた。あのミーティングは抽選会の次の日だったのに、監督は一日であれだけのことを調べあげたんだと驚いた。

山崎のサインを覗き込んだ。初球は外角低めストレートか。ストレートでカウントをとって、最後は

変化球で三振といきたいところだな。山崎もそんなプランなんだろう。体も軽いし、意外と緊張もしていない。いい感じだ。

「よーし」野々村に負けてたまるか。

長身の坂本は気合い充分で大きくふりかぶった。

『坂本くん、ふりかぶって第一球を投げました』

「おりゃあー」坂本がめずらしく声をあげた。しかし、力が入りすぎた感がある。フォームがバラバラになり、アウトステップになってしまった。

『あーっ、ボールはキャッチャー山崎くんの構えるミットとは逆の方向にきました～』

坂本は力が入りすぎ、左バッター菊田のアウトコース低めに投げようとしたボールがインコースに入ってきた。いや、インコースどころか、ボールは菊田の体めがけて向かってきた。

「あーっ」思わず山崎が声をあげた。

菊田は打つ気満々で踏み込んでいったが、慌てて体を後ろへ下げた。

《ドン》

鈍い音がしてボールは菊田の足元にポトリと落ちた。アルプススタンドのブラスバンドの演奏が止み球場が静まりかえった。

菊田はその場に倒れこんだ。山崎は顔を歪めてガクッと首を折った。

「まじかよ」下山がマウンドの坂本のもとへと向かう。

蓑田は黙ってマウンドへと走って行った。サードの相馬も続いてマウンドへ行った。ファーストの宮田は倒れる菊田の方へ向かった。

『あーっと、デッドボールです。ボールは菊田くんの足に当たったでしょうか？ 菊田くん倒れこんでしまいました。痛そうですが大丈夫でしょうか』

山崎が菊田の横で屈んで苦しそうな菊田の顔を覗き込んだ。

「すみません。大丈夫ですか」

菊田は顔を歪めて太ももの辺りを右手で押さえている。左手はぎゅっと拳を握っている。両校ベンチからスプレーを持った選手が菊田のもとに駆け寄った。ベンチから出てきた昌徳高校の選手が菊田の太もものにスプレーをかけはじめる。

山崎はその横で様子を見ていた。菊田も心配だが坂本も心配だ。視線を坂本にやった。帽子をとってこっちを見ている。顔面が蒼白だ。坂本の横には蓑田と下山、相馬が立っていた。

「おいおい、力みすぎ。野々村より先に160キロでも投げようと思ったのかよ」下山が笑いながら坂本の尻をグラブで叩いた。

「さっ、切り替え、切り替え」蓑田も坂本に声をかけて肩をポンと叩いてから、坂本の顔を覗きこみニターと笑った。

「ああ」坂本は笑顔をつくっていたが、蓑田に目を合わせないで倒れる菊田の方に体を向けたまま宙を見ていた。

「大丈夫、大丈夫」「いける、いける」蓑田と下山、相馬はそう言いながら守備位置へと戻っていった。

蓑田は一年前の自身の暴投の時のことを思い出した。あの時、みんなから声をかけられたが、全く耳

に入っていなかった。今の坂本は大丈夫だろうか？ 「切り替え、切り替え」「いける、いける」とかけた声は坂本に届いたのだろうか。セカンドの守備位置から坂本の後ろ姿を見た。大きな体の坂本が小さく見えた。

菊田が右足をかばうようにゆっくりと立ち上がった。

「大丈夫？」山崎が心配そうに声をかけた。

「はい、大丈夫です」菊田は山崎に向けて小さな笑顔をつくって見せた。少し右足を引きずりながらファーストベースへと歩き始めた。球場から拍手が起こった。歩きはじめは足を引きずっていたが、数歩歩いてからは右足の状態を確かめるように地面を強く踏みしめて歩いていた。最後は駆け足でファーストベースへ向かった。ファーストベースについて屈伸をしてその場で跳ねた。

坂本がファーストベースに立った菊田に向かって、もう一度頭を下げた。「すみませんでした」

菊田は「大丈夫です」とヘルメットをとって頭を下げた。球場全体が大きな拍手の渦に包まれた。

『菊田くん、大丈夫そうですね』

『そうですね、当たったのが太ももなので肉の多いところですし、よけかたもうまかったですから大丈夫だと思います』

『ボールのよけかたがうまいのも、やはりセンスを感じますね』

『そうですね。甲子園の初打席、普通はガチガチになって体が動かないものですが、菊田くんは落ち着いてましたね。しっかりボールに反応していましたよ』

『さあ、試合再開です』

ノーアウト一塁だ。やっぱりここは送ってくるだろうな。山崎が初球のサインを出す。バッターの宮中は送りバントの構えだ。

『ノーアウトランナー一塁で、バッターは二番宮中くんです。高崎さん、ここは送ってきますかね』

『そうですね、先制点がほしいですから、定石なら送りバントですが、ランナーの菊田くんは足がありますしバッターの宮中くんは器用なバッターですから、バントと決めつけるのはよくないですね。少し様子をみた方がいいでしょうね』

『セットポジションから、坂本くん、一塁へ速い牽制。菊田くんはベースにもどります。友野高校バッテリーとしてはこれでいいわけですね』

『そうです』

走る気配は無さそうだが、一球様子をみよう。山崎はサインを出し外角へのボールを要求した。坂本は頷いたが、少し顔を歪めたように見えた。坂本、大丈夫か。山崎は唇を噛んだ。

『坂本くん、サインに頷いて、セットポジションから第一球を投げました』

ボールは山崎の構えたミットより外角高めへ大きく外れる。

山崎は飛び上がって腕を目一杯伸ばしミットを出した。ボールは山崎のミットの先になんとか収まった。

ボールをとってから一塁ランナーの菊田を目で牽制してから、「フー」と息を吐いた。

『大きくはずれましたが、山崎くん、よくとりました』

二球目はスライダー、ワンバウンドするボールを山崎が今度は身を挺して止めた。

三球目はすっぽぬけて高めに浮いた。これでスリーボール。まだストライクがとれていない。

『スリーボールになりました。坂本くんストライクが入りません。デッドボールが引きずってますかね』

『そのようですね。坂本くん、頭が真っ白になってるかもしれませんね』

「坂本、何してんだ。バントさせろ」ショートポジションから下山が右手と左手グラブをメガホンにして声をあげる。

「坂本、そうそう、リラックス、リラックス」藪田も同じようにして声をかける。

坂本が二人の方を向いて二度三度頷いたが、いつもの坂本の表情ではなかった。これが甲子園の恐さだ。

セットポジションから坂本が四球目を投げたが高めにぬけた。

『あーっと、これもはっきりとわかるボールです。ストレートのファーボールです。ノーアウトでランナー二塁です』

とりあえず、ストライクがほしい。そしてまずアウト一つとりたい。坂本、落ち着け、あせることない。いつも通りでいいんだ。山崎は心の中で地団駄を踏んだ。

相手は野々村だ。絶対に一点もやれないのに俺は何してんだ。坂本は頭の中で野々村と闘っていた。野々村のバツバツと三振をとっていた予選の映像が頭のなかで流れていた。

『三番の大平くん、ここも送りバントの構えです』

すでに汗びっしょりの坂本がセットポジションにはいった。

『坂本くん、セットポジションから大平くんにたいして第一球を投げました』

ほぼ、真ん中高めだがストライクゾーンにボールがきた。大平はバントしてサード側へうまく転がした。

『大平くん、バントしました。ボールはサード側に転がった。いいバントだ』

坂本がマウンドをおりてボールをとりにいく。サードの相馬も前にくるが、坂本の方が先にボールに追いついた。

「ファースト」山崎がキャッチャーミットをメガホンがわりに口にあて右手でファーストを指さす。

野々村が相手だ。一点もやれないんだよ。サードでアウトにするしかないんだ。坂本には山崎の声が耳に入っていない。ボールをとって体を捻りサードへ投げようとした。ランナーの菊田は足が速い。すでにサード手前まで来ていた。坂本は捻った体を戻しファーストへ送球した。

『坂本くん、一瞬サードに投げようとしたんですが、ファーストへ送球する。これは微妙なタイミングだぞ〜』

打者走者の大平はファーストを駆け抜けた。ベースカバーに入った蓑田が坂本から送球されたボールをとる。

『アウトか、セーフか。微妙なタイミングだ〜』

一塁塁審の手がスーッと横に広がった。

「セーフ」

山崎も坂本も蓑田もみんな天を見上げた。

『ファーストセーフだぁ〜。オールセーフです。ノーアウト満塁です。昌徳高校、チャンスが広がります。友野高校にとっては初回から大ピンチです』

山崎の顔が歪んだ。

タイムをとって、友野高校ベンチから伝令が出る。

『友野高校、早くも守備のタイムをとりました。伝令に背番号12番の控えキャッチャー二年生の笹本くんがマウンドへ向かいます』

一塁側ベンチから伝令の笹本が出てきた。丸い体を揺らしながらマウンドに向かってきた。山崎と蓑田、下山、宮田、相馬もマウンドに集まった。

「あの一、監督からです」伝令の笹本がトーンの高い声を発した。

笹本は頬にたっぷりついた肉のせいで目が押し上げられ恵比寿さんのような顔をしている。笹本も緊張はしているのだろうがニコニコした顔をしている。山崎はその顔を見て少し頬を緩ませた。

「監督、なんて？ 早く言え」下山が笹本の肉のついた紅い頬をつまむ。いつも見る光景だ。これで場の雰囲気祥和む。下山は笹本を可愛がっている。笹本は顔に似合わず下山譲りの負けん気の強さとガッツを前面に出したプレーをする。下山はそんな笹本を気に入っている。

「フフフ」坂本がニヒルに笑った。やっといつもの坂本にもどったと山崎が目細めた。

「あっ、はい。一点は仕方ないから、中間守備で、外野は定位置より深めでいいそうです」

「内野ゴロで一点、ワンヒットで二点かー」蓑田が天を仰いだ。

「バッターは四番大井だ。簡単なバッターじゃない。やむを得ないだろう」山崎が返した。

坂本は「俺のせいですまん」とまた表情がこぼれり小さな声になった。

「すまん、じゃねえよ。そんなことより普通に投げりゃいいんだ。野々村と張り合うから力むんだ」下山が坂本の頭に拳を落としてから、「笹本、お前も坂本を一発ゴツンとやっつけ」と続けた。

「い、いえ、そ、そ、そんな先輩に向かって出来るわけありません」笹本が真剣に返すのを見て、下山が「冗談に決まってるだろ」と今度は笹本の頭をゴツンとやった。

みんなに笑みがこぼれた。

「坂本のボールには力があるから、いつも通りに投げればいいんだ。お前のボールはそうそう打たれない。まだ点を取られたわけじゃないし。もし取られても取りかえせばいい」山崎が言う。

「でも、相手は野々村だぞ」坂本が言う。

「野々村くらい打てるよ。俺たちの打撃を信用しろつつうの。わかった？ 最後に代打の神様笹本が打ってくれるよ。なっ」下山が笹本に顔を近づけて、ニッと唇を広げた。

「相手は関係ない。坂本らしくいこう」蓑田が坂本の背中に手をあてた。

「うん、わかった。もう大丈夫だ」坂本がボールをグラブにパンパンと二度叩きつけた。最後に笹本に「ありがとう」と言って紅い頬をつねった。

笹本は細い目を一段と細くして、「先輩頑張ってください」そう言ってベンチへ走っていった。丸い後ろ姿がユサユサと揺れるのが愛らしい。

『さあ、ノーアウト満塁で試合再開です。友野高校の守備は中間守備ですね』

『一点もやりたくないですが、四番の大井くんですからね。傷口を広げたくないですから、やむを得ないでしょうね』

坂本は山崎のサインを見る。初球は外角のスライダー。サインに頷いてからセットポジションに入る。三塁ランナーを見てから、初球を投げた。外角いっぱいのスライダーを投げ込んだ。

『ストライーク』この試合はじめて球審の右手が上がった。それも最高のボールだ。坂本が立ち直った。これが笹本効果だ。

これまでもピンチで笹本が伝令に来るとムードがガラッと変わることがあった。友野高校のムードメーカーだ。控えのキャッチャーでスタメンで出場することはないが貴重な存在だ。

「ナイスボール」セカンドの蓑田から声が飛んだ。

よし、ナイスボールだ。山崎は坂本に向かって何度も頷く。次のボールだ。内角のストレートだ。これが決まれば、このバッターは抑えられる。山崎が内角ストレートのサインを出した。

内角ストレートか。胸元にズバツと決めるぞ。少し冷静さを取り戻した坂本は山崎のサインに頷いて、セットポジションに入った。三塁ランナーを目で牽制して、「フーー」と長い息を吐いた。

『坂本くん、セットポジションから第二球を投げました』

坂本はバッター大井の内角胸元をめがけて、思いきり腕を振った。少し真ん中よりだが悪いコースではない。

バッターの大井は内角のストレートを待っていたかのような。難しいコースだが、体をうまく回転させてボールをとらえた。

『内角のストレート。大井くん、打った～。打球はレフトポール際へ上がった～。これは大きいぞ～』

「ウワー」と山崎が声を上げる。

「えー」と坂本は打球の行方を追った。

『レフト、榊原くん。懸命にボールを追っていきます。フェンスに背中をつけました。ボールを見上げたままレフトポール際で足が止まりました』

「頼む。とってくれ」山崎がボールの行方を追う。

「切れろ～」坂本が叫ぶ。

レフトの榊原がボールを見上げている。真っ青の空からボールが落ちてくる。

『ファールかフェアか。レフトフライかホームランか』

「たのむー」山崎がレフトの榊原を見ながら声を出す。

レフトの榊原がグラブを出す。ボールはグラブに吸い込まれていった。

『レフトの榊原くん、フェンスいっぱいところでボールをとりました。レフトフライです。三塁ランナーの菊田くん、それを見てタッチアップからゆっくりホームイン。昌徳高校先制！』

山崎は「フー」と息を吐いた。先制点は許したがホームランにならなくてよかった。坂本のボールは悪くなかった。完全に内角ストレートを狙われていた。俺のせいだ。

山崎は気を取りなおし、「ワンアウト、ワンアウト」と人差し指を立てて内外野に声をかけた。

《六番、サード水木くん、サード水木くん》

『バッターは水木くん。昌徳高校としては、もう一点ほしいところですね』

『そうですね。一点で終わると二点、三点とるのでは違ってきますからね。特にさっきの当たりがホームランになりませんでしたから、昌徳高校としては一点で終わりたくないですね』

『逆に友野高校としては一点で食い止めたいところです』

一点とられたことは忘れる。このバッターに集中しよう。山崎が坂本に目で訴えた。坂本もそれに応えるように頷いた。

水木に対してワンボール、ワンストライクからの三球目だった。左バッターの水木は内角低めのスライダーを引っかけることなく坂本の足元に鋭く打ち返した。打球は二遊塁へ飛んだ。

『水木くん、打った〜。痛烈なピッチャーがえし』

蓑田が打球を追う。一年前のあの打球と同じコースだ。あの時より打球は速い。蓑田は横っ飛びでグラブを出した。

『バシッ』グラブにボールが収まった。

『セカンドの蓑田くん、横っ飛びでボールをとりました〜』

蓑田は体を起こし二塁ベースに入る下山にボールを投げる。

『蓑田くん、体を起こし素早くセカンドへ。セカンド、ホースアウト』

下山が蓑田からのボールをとって華麗にファーストへ投げる。

『ショート下山くんからファーストへ』

打者走者の水木も懸命に走る。最後はヘッドスライディングする。

一塁塁審がしばらく固まっている。そして、右手を上げた。

「アウトー」

球場がどよめいた。

『ダブルプレーだ。蓑田くんの超ファインプレーでピンチをしのぎました。これは大きなプレーです。打ちも打ったり、とりもとったりです。初回から素晴らしいプレーが出ました～』

一回表終了 昌徳高校 1対0 友野高校

友野高校のピッチャー坂本は立ち上がりこそ不安定で一点を失ったが、二回以降は立ち直り、九回まで投げて打たれたヒットは七本、与えた四死球は五つ、奪った三振は四つ。二回以降はランナーは許すものの要所を締めて無失点で切り抜けている。伝令の笹本にとって忙しい試合だった。

一方、友野高校打線は八回まで野々村から打ったヒットは二本、もらった四死球が三つ。奪われた三振は十六個を数える。そして、得点はゼロだ。

野々村のこの試合の最高球速は、二回裏四番山崎の二球目に投じたボールが計測した159キロだ。野々村は自己最速を更新したが目標にあげた160キロは出ていない。

九回裏の攻撃を迎える前に、山崎は、監督がミーティングで野々村の攻略方法を唾を飛ばしながら熱く話していたのを思い出していた。

「野々村、あいつは怪物だ。簡単には打てないだろう。三振ばかりになるかもしれない。しかし、三振することを恐れることはない。思いきり三振すればいい。ストレート、スライダー、チェンジアップ。野々村のボールはどれも一級品で高校生離れしている。うちは、どんなボールにファールして食らいつき粘り強く攻撃するのが信条だが、それは野々村に対しては通用しない。しっかり狙い球を絞ってそのボールだけを待つしかない。狙い球がこなければ、あっさり三球三振でも構わない。それくらい割りきるしかない。そのかわり、狙い球が来たら迷わず思いきりバットを振りぬけ。そうすれば野々村を打てる。それと野々村の弱点はスタミナだ。後半コントロールも乱れるし球威も落ちる。後半まで接戦に持ち込めば、後半に攻略できる」

野々村のボールは予想以上だ。山崎は二回裏の最初の打席でそれを感じた。

山崎は狙い球がきたと、思いきりスイングし、ボールを捉えたと思ったのだが、バットがボールに当たった瞬間、バットが球威に負けて、自分の方がバックネットへ飛ばされるのではないかと感じた。完全に振り遅れ、球威に押された打球は野々村の前にコロコロと情けなく転がっていた。山崎は腰砕けになった体を起こし全力でファーストへと走ったが、塁間の半分走ったところで、ファーストにボールが渡っていた。

監督がミーティングで話していた「三振が多くなる」これはやはり当たった。「狙い球を絞れば打てる」は残念ながら野々村のボールはバッターボックスで直に見るのと映像で見るとでは別物だった。「野々村の弱点はスタミナだ。後半攻略できる」はどうなるのだろうか。確かに七回、八回は野々村の球速は落ちているしボールも浮きはじめていたが、それでも打てなかった。残りの攻撃はこの九回裏のみ。ここまで坂本がよく踏ん張って後半勝負の接戦には持ち込めたと思う。あとは攻略できるか、だ。九回は六番の宮田からの打順で自分まで回って来ない。ベンチから声を張り上げ同点、逆転を信じるしかない。もう一度、あの打席に立ちたいと思いながら、宮田がバッターボックスに向かう背中を見た。

九回裏は六番の宮田からだったが、野々村の球威に負けて詰まったセカンドゴロに倒れた。次

のバッター西原はスリーボールツーストライクまで粘ったが、最後は148キロのストレート高めのボール玉に手を出してしまい空振りの三振。

野々村のボールはスピードが落ちコントロールが微妙に狂い始めているが、それでも簡単に打てるわけがなかった。九回裏もすでにツーアウトになった。

『さあ、三日目第三試合も大詰め、九回裏の友野高校の攻撃もツーアウトランナーがありません。得点差はわずかに一点。両チーム合わせてここまでの得点は、初回、昌徳高校四番大井くんの犠牲フライによる一点のみです』

最後のバッターになるのか、八番の相馬がバッターボックスに向かう。

「相馬、ファールボールでもデッドボールでも何でもいいから塁に出てくれ」下山がベンチの一番前で顔の前で両手を合わせた。

相馬はバットを一握り短く持ち、何度も素振りを繰り返した。バッターボックスに入り野々村に向かって「ウォー」と声を張り上げた。

『相馬くんも気合いが入っています。野々村くんはここまで完璧なピッチングですが、得点差は一点、まだわかりません。高崎さん、野球は何が起こるかわかりませんよね』

『そうですね。友野高校はまだ諦めてはいけませんよ。そして昌徳高校は最後まで気を抜かないことですね。野球は本当になにが起こるかわかりませんよ。特に甲子園というところは魔物が棲んでいますからね』

『えー試合やな～。こんな試合みてたら、わしら魔物はウズウズしてくるなあ。なんか、かき回してやりたくなるなあ』

八番の相馬はワンボールツーストライクから三球連続でボールを見極めファールボールで塁に出た。

『あっと、ファールボールです。ツーアウトから友野高校同点のランナーが出ました。野々村くん、最後のボールははっきりとボールとわかる球でした。少し勝ちを意識したのでしょうか』

『野々村くん、前の回から少し疲れが出てるようですし、勝ちを意識して力んでしまったんでしょうね』

ツーアウト、ランナー一塁。バッターは坂本のところで代打が送られる。代打はムードメーカー一笹本だ。

『友野高校、ここで代打ですね。ここまでよく投げてきましたピッチャーの坂本くんに代わって二年生の笹本くんですね。この試合、何度もピンチの場面で伝令に走りピンチを救いましたが、

ここはバットで期待に応えたいところです』

「笹本、絶対に俺まで回せよ」

ネクストバッターズサークルから下山が掠れた声で笹本に檄を飛ばした。

笹本は丸い体をくるりと回して、ネクストバッターズサークルの下山の方に体を向けた。紅い頬が上がり細い目を一段と細くし笑みを浮かべた。

「下山先輩、任せて下さい」右手で厚い胸をドンと叩いた。

笹本はちょちょことした足取りで、左のバッターボックスに入った。バッターボックスに入った途端、人が変わったような鋭い目で野々村を睨み付け、「ウォー」とバットを野々村の方に向けて吠えた。

笹本は粘りをみせた。スリーボールツーストライクからきわどい球を二球ファールにした。

『高崎さん、友野高校も粘り強いですね』

『素晴らしい粘りです。今年の友野高校の強さは、地方大会からのこの粘り強さですね。それがここにきて出ています』

『友野高校、地方大会では劣勢の試合でも後半粘っての逆転が目立ちました。その粘りがここにきて出ています』

粘り強さは今年の友野高校の特徴だ。新チームの頃は、劣勢になるとすぐに諦めムードになるチームだったが、下山の負けん気の強さとがむしゃらさがチームに浸透していった。絶対に負けない、諦めないという強い気持ちをみんなが持つようになっていった。

野々村が笹本に投じた八球目。外角高めに浮いたボールを笹本はコースに逆らわずジャストミートした。

『笹本くん、打った～。痛烈な打球が三遊間の真ん中を抜けていきます』

「よっしゃー、笹本～、よう打った～」下山が右手を突き上げた。

「笹本、ナイスバッティング～」蓑田もつられて右手をあげて、ネクストバッターズサークルへと向かった。

下山がバッターボックスに向かう前に蓑田に声を掛けてきた。

「蓑田、俺は絶対にお前に回す。だから……、」少し声が震えていた。「絶対、去年の借りを返せよ」

下山はヘルメットを深くかぶり下を向いて蓑田の肩を叩いてからバッターボックスへと向かった。蓑田は下山の表情を見ようとしたが見えなかった。

「う、うん、わかった」蓑田はそう言ったが下山は、すでに背中を向けていた。

「下山～」蓑田が大きな声で呼ぶと下山が振り向いた。

「なに？」

「これまで……、いろいろ、ありがとうな」

「ふん、それはこっちのセリフだ。ありがとな。この打席でお前に恩返しするよ。いや罪滅ぼしかな」

下山は薄く笑みを浮かべ、そのままバッターボックスへと小走りで向かった。バッターボックスに立ち、昌徳高校の野々村に向かって声を張り上げた。

「うっしゃー、こーい」

野々村がサインに頷いて、セットポジションに入った。少し間をおいて二塁ランナーを見てから初球を投げこんだ。

下山は初球から積極的に打ちにいった。積極的に初球から打ちに行くところが下山の魅力だ。しかし、下山のフルスイングも低めスライダーに空をきった。野々村はここにきてギアを上げたかのように切れのいいスライダーを投げてきた。

下山は空振りしたあと、「クソー」と自分の頭をヘルメットの上からポンポンと右手で叩いた。

バッターボックスに入り直し肩を上下してから息を「フーッ」と吐いて顔の前にバットを立てて目を閉じた。

「絶対に蓑田にまわしたい。頼む」バットに願いを込めた。

また、野々村に向かって声を張り上げた。

「うっしゃー、こーい」

二球目は外角ストレート。バットが出かかったが、寸前で止まった。きわどいが少し外れている。ボールだ。

三球目は内角ヘストレート。きわどいコースにバットが出ない。判定はストライクだ。これで追い込まれた。ワンボールツーストライク。

「クソー、厳しいコースだ。さすが野々村だけど、俺は絶対にこいつを打つ」

下山は、一度バッターボックスを外し素振りを繰り返してからバッターボックスに入りなおし、足元をならした。

「よーし、こーい」

四球目、スライダーがきた。ストライクゾーンから低めへ鋭く曲がる。下山のバットは止まらない。下山の体制は完全に崩されたが、必死で食らいつこうとする。

『あーっ、と空振り～、三……、いや……』

「ファール、ファール」審判が両手を大きく上げた。

下山はかろうじてバットに当て、ボールはキャッチャーの足元に転がっていた。

三塁側アルプスから歓声が上がったあと、ファールの判定に一塁側アルプスからどよめきが

起こった。

『なかなか、おもしろなってきたな。こんな試合は、やっぱりわしの出番やな。魔物らしいこと、どっかでしたくなってきたわ』

「下山、ナイス粘り～」蓼田は叫んだ。

「おう、絶対に打つぞお。蓼田、しっかり準備しとけよ。お前下手くそなんやから、ボーツとしてたら三振するぞ」バッテリーボックスで野々村に視線をやったまま蓼田に声をかけた。

五球目、またスライダーが外角にきた。さっきより少しコースは甘い。下山は体制を崩されたが、なんとか食らいついて引っかけるようにバットに当てた。

『下山君、打った～。打球は三遊間へ。面白いところに飛んだ～。ショート菊田君、回りこんでよく追いついた～。深い位置からファーストへ～。タイミングはきわどいぞ～。アウトか？ セーフか？』

俊足の下山はヘッドスライディングでファーストベースに飛び込んだ。ファーストベース付近に甲子園の土が舞い上がる。下山の顔と胸は真っ黒になっていた。一塁ベース上で横たわったまま、左手でファーストベースにタッチし右手を横に広げてセーフをアピールしファースト塁審を見上げた。

そして、ファースト塁審の手が大きく横に開いた。

『セーフ、セーフ、セーフだ～。下山君、執念のヘッドスライディングだ～。まだ友野高校の夏は終わりませ～ん。ツーアウト満塁です。友野高校、怪物野々村くんに食い下がります』

下山は起き上がり、蓼田に向かって、真っ黒な顔から白い歯を覗かせて右腕を突き上げた。

蓼田は、それを見て何度も何度も頷いた。「下山、やっぱりお前はすごいよ」熱いものが胸のなかで暴れている。そして大きく息を吐く。

「絶対に去年の借りを返す」

『九回裏ツーアウト満塁。友野高校、一打逆転のチャンスがやってきました』

「下山の執念に絶対にこたえるんだ」蓼田は心のなかで呟いた。

昌徳高校がタイムをとり伝令がマウンドに向かった。

蓼田はこれまでの厳しい練習や下山と口論を繰り返してきた一年間を思い出した。バットに願

いを込めるように顔の前にバットを立てた。

下山にはこの一年間何度も「下手くそ」と言われた。最初は腹が立っていたが、いつの間にか、そう言われることで気が楽になっていた。

「打たせてくれ」バットに向かってそう呟いた。

マウンドに集まっていた昌徳高校の選手の輪が解けた。昌徳高校の選手達はみんな笑っていた。

蓑田も負けずと笑顔をつくってから、バッターボックスに向かった。

「よーし、こい」ピッチャーに向かって声を張り上げたが下山や笹本ほどの迫力はない。少し声が震え、そしてその後、足がガクガクと震えだした。

『バッターは蓑田くん。高崎さん、ここではバッターの蓑田くんはどういうことを心掛ければいいでしょうか』

『そうですね、決してボールに手を出さないことですね。特に低めのスライダーを見極めることが出来るかでしょうね。それを見極められると野々村くんのストレートのスピードも落ちていきますから、バッテリーとしては厳しくなります』

『蓑田君はここまでヒットはありません。ここでこの試合初ヒットが出れば、同点、もしくは逆転サヨナラという場面です』

ピッチャー野々村がセットポジションに入る。

『ピッチャーの野々村くん、第一球を投げました。アウトコース低めのスライダーです』

蓑田は頭の中が真っ白になってしまっていた。初球から打ちにいったが、低めのワンバウンドする明らかなボール球に空振りした。

『完全なボールのスライダーに蓑田くん、空振りです。高崎さん、手が出てしまいましたね』

『そうですね、この球を見極めないと、蓑田くん、厳しいですよ。少し力を抜いた方がいいでしょうね』

「こらー、蓑田、お前、相変わらず下手くそやなあ。下手くそのくせしてビビってんじゃねえよ」下山がファーストベースの上に立って両手をメガホンにして叫んだ。

「うるさいなー」蓑田が下山に返した。

「やかましい、下手くそ、お前がヒット打てるなんてみんな思っていないから、とりあえずバットに当てるくらいしろよ。当てれば何が起こるかわからんからな」

「下手くそ下手くそって、一年間、聞き飽きたよ」蓑田の口から白い歯が覗いた。

二球目は真ん中高めに外れてボール。

三球目の内角ストレートはバックネットにファール。

四球目は低めのスライダーにバットが止まりボール。

『蓑田君、ここはバットがよく止まりました。高崎さん蓑田くん、今はよく見ましたね』

『そうですね、少し落ち着いたようですね』

五球目は野々村の方が力んで高めに大きく外れた。

これで九回裏ツーアウト満塁スリーボールツーストライク、次が勝負の一球になる。

『さあ、泣いても笑っても最後の一球です。高崎さん、しびれる展開ですね』

『そうですね、ここはピッチャーもバッターも結果を怖れず思いきりプレーしてほしいです』

『さあ、野々村くん、セットポジションから第六球を投げました』

内角のストレートが少し甘く入ってきた。蓑田はバットを出しに行く。少しつまらされた打球は三遊間へ飛んだ。ショート菊田の守備範囲だ。

『打った～。打球はショートへ。ショートの菊田くん、軽快なフットワークで打球の正面に入る』

野々村が「よしっ」とグラブを叩いた。

球場にいる選手、観衆、審判の視線が菊田に集まる。

この試合菊田は一年生とは思えない軽快な守備を魅せている。ここでも軽快に打球の正面に入った。

蓑田は全力でファーストへ走る。「クソー、完全につまらされた～」

菊田がグラブを出す。

『あーっ、打球が菊田くんの前ではねた～』

打球は菊田の手前でポーンと跳ねた。菊田はそれに対応しようとグラブを上げたが、ボールは菊田のグラブを嫌がるように、それより高く跳ねて、菊田の肩に当たった。

『打球はイレギュラーして菊田くんの肩に当たり、後ろに転がりました～』

三塁ランナー相馬が同点のホームを踏む。そして逆転のランナー笹本も三塁を蹴ってホームへ

向かってくる。丸い体を揺すってホームへと向かう。笹本は見た目では想像できないくらいに足が速い。

『レフトの下條くんがボールをとってホームへ投げる』

笹本がヘッドスライディングする。レフトからのボールは間に合わない。笹本はユニフォームを真っ黒にしてホームベースをタッチした。

『セーフ、セーフ、セーフだあ。サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ〜』

一塁ベースを駆け抜けた蓑田は、振り返り、笹本がホームにスライディングしている姿、相手のキャッチャーが肩を落としている姿、球審が右手を広げている姿を順番に見てから右腕を上げてガッツポーズした。セカンドベースにいた下山も蓑田に向かってガッツポーズした。

『なんということでしょう。ショート菊田くんの前でボールが高く跳ねました。やはり、やはり、ここ甲子園には魔物が棲んでいまーす。試合終了です。友野高校が九回裏、蓑田くんの逆転サヨナラタイムリーヒットで勝利しました』

蓑田は軽い足取りでスキップでもするようにホームベースへともどっていった。ベンチから出てきた山崎に頭を何度も叩かれた。

蓑田は、頭を叩かれながらショートに視線をやると、そこで立ち上がれないでいる菊田の姿があった。横で野々村が菊田の肩を叩いて笑っていた。菊田は野々村に抱えられてゆっくりと立ち上がり整列のためホームへとふらついた足取りで向かってきた。

菊田の姿を見て、蓑田は去年の自分を思い出した。

菊田と野々村が列に加わった。両チーム挨拶を交わし握手した。野々村は笑っていた。蓑田は菊田の表情を見ようとしたが下を向いたままで見えなかった。

昌徳高校の選手がベンチ前で土を集めていたが、菊田の姿はそこになかった。

結局、甲子園には魔物はいなかった

試合終了 昌徳高校 1対2x 友野高校

試合終了後、蓑田はベンチでバットやグラブを片付けながら昌徳高校のベンチに視線をやり菊田の姿を探した。ベンチの隅で帽子を深くかぶり俯いている菊田の姿をみつけた。泣いているのだろうか。

去年の自分を思い出した。ほとんど記憶にないが嗚咽していたのは確かだ。みんなに申し訳なかった。野球が恐くてやめたいと思った。

今の菊田も辛く申し訳ない気持ちなのだろうか。いや、それ以上かもしれない。怪物野々村を擁し優勝候補と期待されたチーム。勝って当たり前と思われていたチームのレギュラーで唯一の一年生だ。イレギュラーしたとはいえ、後ろに逸らしてしまった。前に落としていたらアウトになって勝利していたかもしれない。アウトにできなくてもサヨナラ負けにはならず同点止まりだったかもしれない。そう考えて辛い気持ちになっているのではないだろうか。

しかし、去年の俺とは違い記録はエラーではなく、ヒットなんだ。菊田よ、気にすることは無い。

「野球やめるなよ。きっといいことあるから」菊田の姿を遠くで見ながら蓑田は呟いた。

全員でグラウンドに向かって一礼しグラウンドを後にした。

監督がマスコミのインタビューを受けていた。蓑田も決勝のサヨナラタイムリーを打ったということでインタビューを受けた。

「サヨナラタイムリーヒット、おめでとうございます」そう言われて、複雑な心境だった。

「ラッキーでした」と作り笑顔を浮かべて答えた。菊田のことを思うと喜べなかった。無愛想なインタビューになりインタビューしてくれている人も眉がハの字にしているのがわかった。話を盛り上げようとしてくれるのはわかるがやめてくれ、早く終わってくれと思った。

息苦しいインタビューが終わってトイレに駆け込むと、洗面台でバシャバシャと顔を洗う背番号6が見えた。昌徳高校のユニフォームだ。菊田だ。おしっこが漏れそうだったが、今声をかけないと一生会うことはないだろう。声を掛けようか悩みながら背番号6が揺れるのを見つめた。菊田が顔を上げ背番号6が正面をむいた。背番号6の向こうの鏡に映る菊田はタオルで顔を拭きはじめた。拭く手をとめて鏡を覗きこんだ時に目が合った。

「あっ」菊田は目が合った瞬間、声をあげた。続けて「すみません。どうぞ」と言ってその場をあげた。蓑田が洗面台の順番を待っているのと勘違いしたようだ。

「あっ、いや」蓑田は何て声を掛ければいいのか悩んでいたら、菊田が蓑田に気づいて先に声をかけた。

「あのっ、友野高校のセカンドの蓑田さん、ですよ」

「あっ、そう。菊田くんだね」

「あっ、はい、昌徳高校の菊田です。今日はナイスゲームでしたね。お疲れさまでした」菊田が

笑みを浮かべながら頭を下げた。嗚咽をもらしている様子はなかった。

「そ、そうだな。お疲れさま」

「次の試合も頑張ってください」と右手を出してきた。笑みが満面に広がっていた。

「あ、ありがとう」藁田は慌てて右手を出した。本当にこいつ一年生かと思うくらい落ち着いていた。去年の自分とはえらい違いだと思った。

藁田は菊田になにか声を掛けてやろうと思った。今日のイレギュラーのことに触れるべきか悩んだが、それはやめることにした。

「実は、去年うちは初戦で負けたんだ。それもあとアウト一つで勝てたのに俺の暴投で負けたんだよ」

「あっ、はい知ってます」菊田の日に焼けた真っ黒な顔から白い歯が覗いている。

「えっ、知ってるんだ」

「はい、去年あの試合はテレビでリアルタイムでみてましたし、今年になってからもスポーツニュースで流れてましたから」

藁田も去年のあのシーンがテレビで放映されたのは知っていた。

『あのエラーから一年、友野高校は忘れ物を取りに甲子園に帰ってきた』そんな内容で放映されていたらしい。

しかし、藁田はその映像をみたくなかったので、詳しくは知らない。

「俺の暴投のシーンが流れてたのかー。ちょっと恥ずかしいな」

「僕はしっかりみましたよ」菊田はニヤニヤと笑っている。

「そうなんだ」

「藁田さん、打球に追い付くまでは、すごく素早くてグラブさばきも完璧だったのに、なぜかファーストへ投げる瞬間、体がファースト側に正面に向いてしまって、ギクシャクした動きになってましたよね。ボールをとってから慎重になりすぎたみたいに見えました」

「そ、そうかな」自分ではわからなかったが、そんなにギクシャクしてたのか。それに、なんなんだ、この一年生は？ すげえな。俺よりしっかりしてるじゃないか。

けど、ここは、先輩らしくアドバイスしておこう。

「で、さあ」

「あっ、はい」

「俺は、あの暴投で野球をやめようとも思ったんだけど」

「えっ、そうだったんですか」

「うん、でもな、野球部のみんなのおかげで野球を続けることができた。そして、自分で言うのも、なんだけど、あののおかげですごく成長できたよ」

「そうですか。良かったですね」

「うん、良かった。だから菊田くんも今日のエラーで落ち込んで野球をやめるなんて思わないで、来年取り返すつもりで頑張ってくれよな」

エラーと言ってしまったが、エラーではない。イレギュラーヒットだ。しまった、と藁田は言いなおそうと思ったがタイミングを失った。

「ご心配していただいて、ありがとうございます。明日からイレギュラーしたくらいでエラーしないように練習に励みます。そして日本一のショートになります」白い歯をさっきより大きく覗かせていた。

「あっ、そ、そうか。が、がんばってな。それに、あれはエラーじゃないよな。イレギュラーしたもんな」

「でも、エラーみたいなもんでしょ。ボールを後ろに逸らしちゃいましたから。上手いショートなら、とれなくても体の前におとしています。後ろには逸らしません」

「そ、そうか。日本一のショートか」

「はい、日本一、いや世界一目指さないとダメですかね」

「うん、そうだな。世界一目指して頑張るってな」

「あれ打ったのは、蓑田さんでしたよね」

「そ、そうだけど」

「ヒーローですね」

菊田は満面の笑みを浮かべているので悪気は無さそうだが、蓑田には嫌味のようにきこえた。

「いや、けど、やっぱりクリーンヒットじゃないからな。あれは、甲子園の魔物のおかげかな」

「甲子園の魔物……、ですか？　ヘー」菊田は意味深な笑みを浮かべて視線を宙にやった。魔物なんか信じてるのかよといった表情に見えた。

「甲子園の魔物は信じない？」

「うーん、そうですね。魔物がいるとしたら、甲子園じゃなくて自分のなかにいるんだと思います」

「自分のなかに魔物？」

「はい、あの打球をとる時、よし、これで勝ったと思ってボールから目を離してしまいました。僕が打球をとる前に勝ったと思ってしまった気持ち、それが魔物の正体だと思います」

「でも、イレギュラーしたのは魔物の仕業じゃないかな」

「イレギュラーは野球にはつきものですよ。魔物のせいじゃありません。それも頭にいれておくべきでした」

「すごいね」

「じゃあ、いきます。次の試合応援してます。蓑田さん、頑張ってください」

「ありがとう」

「失礼します」

菊田は深々と頭を下げてトイレから出ていった。

友野高校の次の対戦相手は、またも優勝候補。甲子園春夏合わせて六度の優勝を誇る相陰学園だ。野々村のような怪物ではないが安定感抜群の技巧派サウスポー川原と右の本格派遠藤を擁し、二人とも簡単には攻略できるピッチャーではない。打線は下位まで切れ目のない強力打線だ。投打にバランスのとれたチームだ。

友野高校対相陰学園の試合は、初回から動いた。

坂本はいきなり相陰学園のプロ注目の四番打者三浦にツーランホームランを浴びて二点の先制点を許した。

二回はゼロで切り抜けたが、三回にはタイムリーツーベースとスクイズで三点を失った。

三回までで五点のリードを許した。坂本の調子は悪くなかったが相陰打線はボール玉には手を出さないしきわどいコースはカットする。甘いコースを待って確実に仕止めてくる。盗塁、バント、エンドランとバッティング以外でも攻撃力のレベルは高い。坂本も自分の投球ができなくなっていた。

二番手で投げた宮田も六回につかまった。満塁から走者一掃のタイムリーツーベースを打たれて得点差は八点になった。

友野高校も七回に山崎のタイムリーヒットで一点返したが、八回に相陰学園二番手で登板していたピッチャーの遠藤にバックスクリーンに飛び込むソロホームランを浴びた。

結局 友野高校 1対9 相陰学園 完敗だった。

こんなスキのないチームと試合したのははじめてだった。相陰学園は、その後も勝ち上がり甲子園七度目の優勝を果たした。蓑田は相陰学園に勝てるチームなんてあるんだろうかと思った。あの攻撃は半端ないと思った時、野々村のピッチングが頭を過った。

もし、二回戦で友野高校が昌徳高校に負けていて、昌徳高校と相陰学園が対戦していたら、どうなったのだろうか。

怪物野々村VS相陰学園打線。注目の試合になっただろう。

組合せ抽選会のあと、順当なら、この対決が二回戦でみられると、多くの高校野球ファンはワクワクしていたはずだ。

しかし、順当にいかないのもスポーツの面白さだ。特に高校野球は何が起こるかわからない。

菊田はバカにするかもしれないが、魔物が邪魔をすることがあるのだ。友野高校が昌徳高校にまさかのサヨナラ勝ちをして、夢の対決を期待していた多くの高校野球ファンは残念に思ったかもしれない。蓑田も昌徳高校と相陰学園、両方と対戦して、両校の凄さを肌で感じた。この二校が対戦したら、すごい試合になるんだろうなと思った。

野々村のピッチングと相陰学園のしぶとくスキのない野球。興奮する試合になったことは間違いない。

全くスキがなかった相陰学園にも魔物があらわれて邪魔をすることがあるのだろうか？ 甲子園での試合をみるかぎり全くそんなことはなかった。魔物はえこひいきして相陰学園にはあらわれないのだろうか？

菊田の言葉を思い出した。

「魔物がいるとしたら、甲子園じゃなくて自分のなかにいるんだと思います」

確かにそうかもしれない。甲子園という大舞台で自分を見失い、そこに魔物が顔を出すのだ。それを頭にいれて練習し準備しておかないといけないんだろう。優勝経験豊富なスター選手が揃

った相陰学園の選手たちはそれができているのだ。

蓑田には、そこまでの経験も技術も精神力もなかっただけだ。しかし、魔物に邪魔をされてしくじってもいい。それも経験だ。きっと、それも魔物がくれた自分を大きくしてくれる未来へのプレゼントなのかもしれない。

蓑田にとってはみんなに迷惑をかけたのは申し訳なかったが、魔物のおかげで良い経験ができた、今になって思う。

「魔物よありがとう。けど、これからの人生は魔物に邪魔されないような準備をしておくよ。もし邪魔されても落ち込むことなく、前を向くよ」

夏のあとがき

『九回裏、ツーアウトランナー二塁三塁。一打出れば逆転サヨナラの場面です』

小学二年生の翔太はプロ野球中継をテレビの前に釘づけになってみていた。応援するジャガーズが一点をリードしているが、最終回サヨナラ負けのピンチをむかえ、翔太は祈るように両手を合わせていた。

「翔太、目を悪くするから後ろでみなさい」キッチンに立つ母親から注意されるが、全く耳には入っていない。

「お父さんが近くでみるから翔太も真似するんじゃない」父親も翔太の隣にあぐらをかきテレビの前に陣取っていた。

「この試合終わったらな」翔太の隣で同じポーズで応援する父親がテレビ画面から目を離さずに言った。

「はあー」母親は同じポーズでテレビの前に並ぶ二人を呆れるように見ていた。

『打った～。打球は三遊間に飛んだ～』

「うわー、ヤバーイ」翔太は悲鳴をあげた。

「ショートとれー」父親も叫んだ。

『ショートがまわりこんで打球に追い付いたー』

「よーし、さすが菊田～」翔太が叫んだ。

『おーっと、打球がイレギュラーして大きくはねたー』

「うそー」

『ショートの菊田、そのボールを軽快なグラブさばきでとりました』

「よしっ」

『三遊間の深い所から一塁へ、矢のような送球』

「アウトになれー」胸の前で合わず翔太の両手は汗ばんでいた。

『ファーストは間一髪アウトでーす』

「よーし、勝ったー。フー、危なかった。でもさすが菊田だー」翔太は汗ばんだ両手をあげて喜んだ。隣の父親とハイタッチした。

『スリーアウト、試合終了です。最後は、さすが、三年連続ゴールデングラブの菊田の守備でした。ヒットゾーンの当たりも難なくさばいてみせます』

「やっぱり、すごえな菊田は。俺も菊田みたいなプロ野球選手になりたいな」

翔太はプロ野球で活躍する菊田のプレーに目を輝かせていた。

「今の菊田があるのも俺のおかげだなあ」父親は母親の忠告通り後ろに下がりソファに腰掛けながら言った。

翔太もそれにならって父親の隣に座った。

「お父さん、菊田選手と知り合いなのか」

「ハハハ、まあな。高校の時、甲子園で対戦したことがあるんだよ」

「えっ、本当？」翔太は父親の顔をじっと見た。その後、母親に視線をやった。母親が首を傾げたのを見て、また父親の顔を見た。

「なに、翔太は信じてないのか」

「うーん、信じられない。お母さん、本当？」翔太はもう一度、母親に視線をやった。

「甲子園で対戦したのは本当だけどね。お父さんのおかげで菊田選手の今があるかは疑問かな」

「何言ってるの。菊田との試合の後、菊田がエラーして落ち込んでたから、俺がちょっとアドバイスしてやったんだ」

「うそでしょ」翔太が目を丸くして父親の顔を覗きこんだ。

「うそじゃないよ、本当だよ。菊田がエラーして落ち込んで野球やめるって言ってたのを俺が止めたんだ。これくらいのことやめるな、これをバネにして、これから練習に励めって言ってやったんだよ」

「それ、本当なら、お父さん、すごいよ」

「ハハハ、本当に決まってるだろ。翔太はお父さんのこと見直したか？」

「うん、すごい」

「翔太にそう言ってもらって父さんも嬉しいよ」

「お母さん、お父さんが菊田選手にアドバイスしたことは知ってるの？」

「うーん、どうなのかな。試合のあと菊田選手に偶然トイレで会って話したのはきいてたけど。別にお父さんと話したから菊田選手の今があるわけじゃないと思うけど」

「いいや、菊田はあの試合でエラーして野球をやめるかもしれなかったんだぞ。俺のアドバイスのおかげで野球を続けてるんだって。あの時、菊田は俺に約束したんだ。こんなことでくじけずに野球を続けます。そして日本一のショート、いや世界一のショートになります。そう言ったんだ」

「そうかなあ。菊田選手は、あなたと違ってそんな柔なタイプじゃなかったと思うけど」

「いや、俺が見た時、菊田は泣きじゃくってたんだぞ」

「ふーん」

「なに、その顔。信用してないのか」

「菊田選手って、あの時、悔しそうにはしてたけど泣いてるように見えなかったから」

「アルプスから見てるだけじゃわからないよ。菊田も今でこそスーパースターだけど、高校生の頃は子供だったからな」

「あなたの方こそ、その前の年にエラーして落ち込んで泣いてたじゃない。わたしが声掛けてなかったら、野球やめてたでしょ」

「翔太の前で、でまかせ言うな」

「でまかせじゃないでしょ」

「あれは、ちょっと悩んでただけだ。里美こそ俺に声掛けるチャンスだと思ってたんじゃないのか」

「ふん、なに偉そうに言ってんの。わたしはあの時、全くそんな気なかったからね。監督に頼まれたから、仕方なく声掛けたんだからね」

『おいおい、子供の前やぞ。夫婦喧嘩するなよな。どっちにしろ、すべては、わし、魔物がお前らを成長させるためにやったことや。菊田はあの試合でわしのイタズラに対応出来なかったけど、その後ポジティブにとらえて練習に取り組み、今の菊田選手がある。蓑田はフラフラしたけど、周りの仲間に支えられながら成長して、周りの有り難さに気付くことができた。わしも計算外やったけど、監督が蓑田に送りこんだ刺客と結婚して幸せにもなれたしな。まっ、全てうまくいったわ。それから、わしは菊田の言うとおりに、甲子園にいるわけやない。みんなの心に潜んでるんや。だから、いつ姿見せるかわからん。普段から心の準備はしといた方がええで』